

瀧口。いけない、いけない。それを持つて行つちやあ……。
長吉。ちやあ、早くおいでなさいよ。
瀧口。困るなあ。

（春若は笑ひながら寫眞を持ちて、下のかたへ去る。）
瀧口。おい、冗談しちやあいけないよ。
小松。だから、お出でなさいよ。はムムムム。

（小松と長吉は笑ひながら瀧口を引張つて、これも下のかたへ去る。すこしく間を置きて、奥の襖をあげ、鶴子は一人の若僧に案内されて出づ。）

僧。や、瀧口さんは……。今までこゝにおいでぢやつたが、どこへ出られたかな。
鶴子。お留守なのでございますか。

僧。なんとも断らずに出て行かれたのぢやから、すぐに戻つて来られませう。あなたならお差支へはござらぬ。まあ、些との間お待ちなされたがよい。

鶴子。はい。（不安さうに坐る。）
僧。火鉢に炭をつぎて。お暖かいやうでも夜は矢はり冷えますなう。

鶴子。どうぞお構ひなく。

僧。あなたは浦上さんのお嬢さんでござりませうな。

鶴子。（低い聲で。）はい。

僧。たび／＼御近所でお見かけ申したことがござります。さあ、どうぞお手をおかざし下さい。（火鉢を出す。鶴子は軽く會釋す。）瀧口さんは始終お屋敷へ伺ふやうでござりますな。

鶴子。はい。

僧。（下のかたを指さして。）この隣の寺にゐる澤田さんといふ若い畫家も、矢はりお出入りをいたすさうで……。

鶴子。はい。毎日お出でになります。

僧。奥さんの肖像をかくと云ふので……。ほんたうでござりますか。

鶴子。（やゝ不快な顔をして。）まあ、さうでござります。（かんがへて。）澤田さんもこちらへ伺ひますか。

僧。（うなづいて。）垣根一重の隣ですから、をり／＼に遊びに来られます。なんでも人の噂にやりますと、瀧口さんよりもあの人の方が、腕はよほど優れてゐるさうでござりますな。こ

このお師匠様もそのやうに申して居られました。

鶴子。

(忌な顔をして。)さうでございませうかねえ。

僧。

第一に澤田さんの方が、人物も正直でおとなしさうに見えますな。

鶴子。

(聞くを厭ふやうに。)わたくしはよく存じませんが……。 (すこしく詞を正うして。)人は見かけに因りませんからねえ。

僧。

いや、大きに御もつともで……。 (頭をなでて。)では、御退屈でも暫らくこゝにお待ちくださいませ。

鶴子。

夜分に突然うかゞひまして……。

僧。

いや、どう致して。では、御ゆつくりと……。御用があつたら御遠慮なくお呼び下さりませ。

鶴子。

ありがとうございます。

僧。

では、御免……。

鶴子。

(僧は奥に入る。時の鐘きこゆ。)

鶴子。

もう八時かしら。

鶴子。

(鐘の音つゞけてきこゆ。鶴子は火鉢に手をかざして、寂しさうに坐りゐたりしが、やがて彼の小松の置き忘れたる烟管と烟草入れを見つくる。)

藤子。

おや、こゝにこんなものが……。 (烟管と烟草入れを手取る。)

藤子。

たづねて来たのかしら。(稍や不安さうに眉をひそめてちつと眺めてゐる。)

鶴子。

(下のかたの庭口より藤子がかゞひ出づ。)

藤子。

鶴子さん。やつぱりこゝに来てゐたんですね。

鶴子。

(驚きて起ちあがる。)あら、お母さん。

藤子。

きつとこゝに来てゐるだらうと思つたのです。(縁にあがる。)

藤子。

(さびしく打笑む。)それは知つてゐます。わかつてゐます。東京のお友達がみんな歸つてか

ら、あなたは頻りに何かかんがへてゐる様子で、お風呂が済むと竊と表へ……。もしやと思つてあとをつけて来ると、案の通りこのお寺へ……。 (鶴子は黙してうつむく。) あなたは一體こゝへ何しに來たんです。え、鶴子さん。(聲を和けて。)隠さずに云つて下さい。(鶴子は矢張り黙してゐる。)そこで、瀧口さんは。

鶴子。(低い聲で。)お留守です。

藤子。あなたの持つてるのは……。

鶴子。こゝにあつたんです。(煙管と煙草入れを下に置く。)

藤子。あゝ、それぢやあ、まつたく今のは……瀧口さんに相違ない。

鶴子。途中で逢ひなすつたんですか。

藤子。たつた今そこで……。藝妓のやうな女と四人連れで、だらしのない風をして、なにか巫山

戯ながら行つた人が、どうもさうらしいと思つたが……。その煙草入れも屹とあの女達が忘れて行つたに相違ありません。(嘆息して。)鶴子さん。あなたはそれでも瀧口といふ人を信用しますか。

(鶴子は答へず、再び煙草入れを手に取りて妬ましげに眺めてゐる。)

藤子。(憫むやうに。)わたしは別になんにも云ひませんから、すぐにお歸んなさい。ね、判りましたか。(鶴子は矢はり黙してゐる。)今夜のことはわたし一人の胸に收めて置いて、決して誰

にも云ひませんから……。)

(捨鉢の、稍や反抗の態度で。)云つてもようござんす。わたしには別に悪いことは無いんです

から……。

藤子。たとひ悪いことは無くつても、男一人のゐるところへ、若い女が……。しかも夜になつて訪ねて来て……。人が聞いたらなんといふでせう。

鶴子。云ふ人にはなんとでも勝手に云はして置けばようござんす。わたしよりも悪い女は世間にも澤山ありますから。(すこしく嘲けるやうに藤子を見る。)

藤子。悪い人の眞似は爲なくつても可いでせう。あなたは年がまだ若いから、心が色々に迷つてゐるんです。なんでも自分のすることを遊び事のやうに思つてゐてはいけませんよ。人間といふものは、手一つ出すにも必ずそれだけの理窟がある筈ですからね。自分の實の子でないから、わたしもこれまで何にも云はずにゐましたが、あなたはおとなしいやうで、心はなかく意地つ張りの、随分強情な性質なんです。その意地つ張りから眞直な路を踏みちがへて、取返しの付かない仕損じが出来ないとも限りませんから、よく氣を注げなければなりませんよ。うっかり人を信用すると飛んだ間違ひが出来しますよ。

鶴子。どうせ世の中は間違ひだらけです。間違ひは毎日方々で出来してゐるんでせう。

藤子。あなたもその間違ひの仲間入りがしたいんですか。あなたが今夜こゝへ来たのは、瀧口と

いふ人に欺されたんでせう。あの人は決してあなたが信じてゐるやうな正しい人ぢやありませんよ。

鶴子。

瀧口さんがなぜ悪いんでせう。

藤子。

わたしも昨今のお附合で、委しいことは知りませんが、お隣の澤田さんのところで、旦那様がはじめてお逢ひなすつたのが縁になつて、それから家の方へも足を近く出這入りするやうになつたんですが、あの瀧口といふ人は初めからなんだか忌な人だと思つてゐました。澤田さんの話を聞くと、随分品行のよくない人で、女をだますのを商賣のやうにしてゐる……。

鶴子。

(興奮して)お母さんはなんでも澤田さんの云ふことを信用なさるんですね。わたしの眼から観れば、瀧口さんよりも澤田さんの方が、倍の倍も悪い人です。(藤子は、ちつと鶴子の顔を見る。)えゝ、さうですわ。たしかに悪い人ですわ。澤田と云ふ人こそ女をだますのを商賣にして……。

藤子。

(静かに制して)それは違ひますよ。澤田さんといふ人は決してそんな卑しい人ぢやありません。年こそ若い而立派な人です。

鶴子。

(いよゝ冷笑ふ)さうでせう。澤田さんも丁度同じやうなことを云つて、お母さんのことを褒めてゐました。つまり、あなたと澤田さんとは性が合つてゐるんでせう。わたしとは性が合ひません。

藤子。

性の合はない澤田さんに、あなたはなぜ寫眞を遣つたりしたんです。わたしはみんな知つてゐますよ。

鶴子。

(すこし怯みしが、いよゝ捨鉢になる)あんな人とは知らないから遣つたんですが、欺されたといふことが判りましたから、もう取返してしまひました。

藤子。

取返した寫眞はどうしました。まさか瀧口さんに遣りやあしますまいね。(鶴子は黙してゐる。)あんな人に迂闊したことをしたら、それこそ大變ですよ。それを種にしてどんな難題や脅迫を仕向けて來るかも知れませんよ。おそろしい蛇にみこまれたら、あなたはどようする積りです。

鶴子。

わたしは斯う見えても、蛙のやうな弱い者ぢやありません。

藤子。

いくら強がつても、所詮若い女は弱いものです。論より證據、あなたは男に欺されてゐるぢやありませんか。兎に角あなたは斯ういふところに出這入りしちやあいけません。瀧口

なんていふ人と親密に交際しちやあ不可ません。あなたが強情を張つて、どうしても不承知なら、お父さんにさう申して、瀧口さんの出入りを差止めて貰ひますから。

わたしもお父さんにさう云つて、澤田さんの出入りを差止めて貰ひます。

藤子。澤田さんを……。なぜそんなことを云ふんです。

鶴子。なぜでもようござんす。自然にわかる時もあるでせう。あなたが澤田さんの最良をすればするほど、わたしは澤田さんのことを悪く云ひます。どうせわたしは憎まれ者ですから……。

藤子。あなたは人の云ふことを、なんでも僻んで聞くんですね。(嘆息する。)

鶴子。どうせ繼つ子根性ですから、僻んでゐるかも知れません。

藤子。わたしの方には繼母といふ料簡は少しも無いのに……。あなたの方では兎かくに僻んで聞く。それが何より悪いんですよ。

鶴子。どうせ妾が悪いんです。あゝ、死んだお母さんがゐるて下すつたら……。 (泣く。)

藤子。そのお母さんの代りに、あなたの爲を思つて、わたしがかうして心配してゐるのが判りませんか。

鶴子。わたしのからだは妾の自由です。死なうと生きようと勝手です。餘計な御心配には及びません。わたしはもうあなたをお母さんとは思ひませんから……。

藤子。あなたは本氣でそんなことを云ふんですか。(むつとしたるが又取鎮めて) まあ、なんとでも仰しやい。それは兎も角も、あなたはどうしても瀧口さんのやうな悪い人と交際してはいけません。

鶴子。わたしのことを云ふよりも、あなたこそ澤田さんと交際なさるな。

藤子。いゝえ、それは別のことです。

鶴子。別のことぢやありません。

藤子。あなたは何うしてもわたしの云ふことを肯かないんですね。

鶴子。(いよいよ激して) 肯かないと云つたら、あなたは屹とお父さんに密告ると云ふんでせう。密告てもようござんす。わたしの方にも密告ることが澤山ありますから……。

藤子。なにを密告るんです。わたしはお父さんに密告られるやうな後暗いことをした覚えはありませんよ。

鶴子。屹とありませんか。

藤子。ありません。(おちついて。)あなたとは違ひます。
鶴子。(赫となつて。)ようござんす。ぢやあ、わたしはこれから家へ歸つて、お父さんの前へ行つ

て、あなたの悪いことも、わたしの悪いことも、兩方ともにすつかり話し合つて、どつちが悪いか公平に裁判して貰ひます。さう思つてゐてください。(起つて奥へ行かんとす。)

藤子。(ひき止めて。)まあ、お待ちなさい。
鶴子。忌です、いやです。(振切つて行かんとす。)

藤子。いけません、いけません。
(藤子はその行手を遮るに、鶴子は更に縁に出て、庭より駈降りて行かんとす。藤子は追ひ縋りて、うしろより抱きとめ、縁の上にはき据ゑる。)

藤子。それがあなたの我儘で……。一番悪い癖なんですよ。もし妾に悪いことがあるなら、なにを云はれても構ひません。お父さんの前でも、神様の前でも、どこへでも行つて、勝手に云つてください。構ひませんから何とでも云つて下さい。けれども、さういふ風に事をあら立てると、あなたの事もお父さんの耳へ這入るんですよ。
鶴子。どうせあなたがお父さんに云ふんでせう。

藤子。なるほど、わたしはお父さんにさう云つて、瀧口さんの出入りを差止めて貰ふと云ひました。けれども、それはあなたが何うしても背かない時のことですよ。なるべくはお父さんの耳へ入れたくないと思へばこそ、さつきから口を酸くして云つてゐるのが判りませんか。あなたはお父さんに心配がかけたいのですか。諄くもいふ通り、あなたはなんでも僻んで聞くから、總てのことが間違ふのです。よく考へて御覽なさい。わたしが世間なみの繼母根性で、腹を假さないあなたを憎いと思ふほどならば、蔭へ廻つてこんな心配はしませんよ。どうかしてお父さんの耳へも入れたくない、第一にはあなたを救つてあげたいと思へばこそ……。涙をうかべて。あなたは年が若いから人にだまされ易い。現在悪い人に欺されようとしてゐる。うつちやつて置けば見すく、暗い淵へ落ちてゆく。それを黙つて見てゐられますか。假にも母子の名が附いてゐる以上、どうしてもあなたを救はなければ、わたしの役目が濟みませんよ。(しみんと云ひ聞かせる。鶴子は黙して聴く。)どう考へても瀧口といふ人は決して頼もしい人ぢやありません。現に今夜も藝妓なんぞと往來を巫山戯あゝるいてゐるぢやありませんか。(落ちたる烟草入れを鶴子に示して。)あなたに對してはどんな巧いことを云つてゐるか知りませんが、現在目と鼻の間でこんな不品行を働いてゐる人な

んですよ。あの人の料簡では、あなたもこの煙草入れの持主も、同じやうに思つてゐるの
でせう。わたしの口からかう云ふと、あなたは又悪く取るかも知れませんが、ほかの人が
ら意見されたと思つて、よくもう一度かんがへ直して御覽なさい。ね、判りましたか。

(鶴子も今度は強く争はず、縁に手をついてちつと考へてゐる。)

藤子。 さあ、これで判らなければもう仕方がありません。ふたりで一緒に父さんの前へ行きま
せう。さうして、なんだか知りませんが、わたしの悪いことを云つて貰ひませう。

鶴子さん。 どうします。

(柔しく云はれて、鶴子は猶黙してゐる。下のかたより瀧口と小松出づ。)

小松。 あたしの煙草入れがそこらにあるでせう。

瀧口。 多分座敷へ忘れて置いたんだらう。

(云ひつゝ、此方を透し視て、俄にうるたへたる體にて、あわて、小松を押戻す。)

小松。 (よろめきながら) あれ、なにをするんですよ。

瀧口。 (小聲で) 静に、静に……。まあ、些との間、あつちへ……。

小松。 (心附く) あら、お客様……。女の方ねえ。

瀧口。 まあ、なんでもいいから……。早く、早く……。

(無理に押遣られて、小松は早々に下のかたへ去る。瀧口は縁先に來る。)

瀧口。 やあ、奥さん、お嬢さん。あいにく留守にしまして、どうも失禮をいたしました。

藤子。 (やゝ當惑の體にて) わたくし共こそ御留守へ出まして……。

瀧口。 よくお出でくださいました。(不思議さうに藤子と鶴子とを見くらべて) そんな縁端でなく、
どうぞこちらへ……すつと此方へ……。(縁に上がりて座に着く) や、火鉢の火がもう無くな
りさうだ。獨身者はこれだから困ります。は、ムムムム。(再び起つて炭取を持ち來り、炭を
つぐ。)

藤子。 いえ、もうお構ひ下さいますな。

瀧口。 (覗くやうにみて) 鶴子さんはどうかですか。

藤子。 いえ、別に……。 (手持無沙汰の體にて) 今晚は大分お暖かでございますね。

瀧口。 急に陽氣が春めいて來ました。(これも何やら手持無沙汰にて) あの、お二人さんお揃ひで、
御散歩にでも御出かけでしたか。それとも何か御用で……。

藤子。 (返事に困つて) 實はあの、二人でこゝらへ散歩に出ましたのですが……。 (鶴子を見かへる)

藤子。 鎌倉の一夜

藤子。 鎌倉の一夜

藤子。 鎌倉の一夜

藤子。 鎌倉の一夜

藤子。 鎌倉の一夜

藤子。 鎌倉の一夜

藤子。 鎌倉の一夜

藤子。 鎌倉の一夜

藤子。 鎌倉の一夜

藤子。 鎌倉の一夜

藤子。 鎌倉の一夜

瀧口。これが鳥渡お寄り申さうと云ひましたので、お留守とは知らずに……。
 あゝ、左様ですか。鶴子さんが寄らうと仰しやつたんですか。(瀧子は顔をあげる。瀧口は笑を含んで) どうも失禮をいたしました。

鶴子。どういたしまして……。

瀧口。なにしろ、よくおたづね下さいました。まあ、御ゆつくりなさいまし。

藤子。ありがとうございましたですが、もう遅くなりますから……。

瀧口。まあ、可いぢやありませんか。折角今までお待ち下すつたのに、すぐにお歸し申してはわたくしの気が濟みません。まあ、お茶でも淹れますから……。

藤子。もうお茶は澤山でございます。

(下のかたより小松は顔を出してうかゞふ。瀧口は首を振りて、出てはならぬと眼で叱るを、藤子は横目でちろりと見る。小松は再びかくれる。鶴子も見かへりて、やゝ妬ましげに睨む。)

藤子。(思案して)あの、瀧口さん、少しお願ひ申したいことがあるのでございしますが……。

瀧口。はあ、なんの御用で……。

藤子。あの、今日この鶴子がお何かあなたに差上げたものがあるさうでございしますが……。あんな

ものを人様にお渡し申して置きますと、又どんな間違ひが出来まいものでもございせんから、一旦お返しを願ひたいのですが……。如何でございませう。

瀧口。返せと仰しやるのは……。

藤子。鶴子の寫真でございます。

瀧口。寫真……。 (かんがへる) 鶴子さん、お返し申しても可いんですか。

鶴子。(小聲で)はい。

(不平らしく) さうですか。しかし一旦呉れたものを又返せといふのは、子供でさへも返し泥坊とか云ふぢやありませんか。奥さん、折角のお頼みですが、わたくしは一度頂戴したものを、無條件でお返し申すといふのは、些と困るんですが……。

藤子。わたくし共の娘の寫真などはあなたの御手許にあつても仕様がございますまいから、もつと大事なものとお取換へ申しませう。

瀧口。大事なものは……。なんですか。

藤子。どうぞこれと御取換へ下さいまし。(彼の烟管と烟草入れを出す。)

瀧口。(すこしく慌てしが又あざ笑ふ) 奥さん、あなたはなか／＼芝居がお上手ですねえ。いや、

どうも恐れ入りました。では、兎やかう云はずに、綺麗にお取換へ申ませう。(紙入れより鶴子の寫眞を出す。)

藤子。

たしかに頂戴しました。(寫眞を懐中する。)これでわたくしも安心いたしました。では、あまり遅くなるといけませんから、もうこれでお暇いたしましたせう。どうも御邪魔を致しました。さあ、鶴子さん。(鶴子の手を取りて起たとす。)

瀧口。

もし、奥さん。まあ、お待ち下さいまし。(藤子見かへる。)あなたがそんな芝居をなさるなら、わたくしの方でも負けない氣になつて、これから一芝居打たなかりやありません。よござんすか。しつかりして下さい。あなたとわたくしとの腕比べですよ。

藤子。

わたくし共には迎もあなたの御相手は出来ませんから、どうか御免くださいまし。

瀧口。

卑怯なことを仰しやるな。ねえ、奥さん。あなたは浦上桂藏といふ實業家の奥さんで、世間では立派な御夫人と認めてゐます。いや、世間ばかりぢやない。現在あなたの旦那様も確にさう信じてゐるんでせう。まことに結構なことです。けれども、若しこゝに何等かの暗い祕密があつて、それを委しく知つてゐる人間が突然にあらはれて來たら、あなたはどうなさるでせう。ねえ、奥さん。あなたは實に立派な方です。この間もあなたの自動車に

藤子。

突きあたつた昔のお友達に、十圓札を惜氣もなく恵んでお遣りになつたさうで……。さういふ美しいお心掛だから、つまりこんなに御出世なすつたのです。

瀧口。

(すゝく顔色を變へしが、又おちついて。)ほゝ、それは誰かの間違ひでございませう。わたくしは昔のお友達なんかを恵んだ覚えはありません。

ぢやあ、あなたの方では知らずに恵んでお遣りなすつたのでせう。猶更立派なことです。しかしお友達の方では確にあなたを知つてゐたんですよ。人間と云ふものには口がありませんから、どこへ行つてどんなことをべら／＼饒舌らないとも限りません。さうなると、あなたばかりでなく旦那様の御名譽にもかゝはりやあしませんか。わたくしは唯それを心配してゐるんです。

藤子。

御深切はまことに有難うございます。併しなんですか謎のやうなお話で、わたくしにはよく判りませんのですが……。

瀧口。

お判りにならなければ、いつそのこと、こゝへ證人を呼びませうか。それが早くつて可い。(下の方にむかひて。)おい、おい。

小松。

(顔を出す。)あたしですか。

瀧口。む。ちよいとこへ来てくれ。

小松。行つても可いんですか。

瀧口。いゝから早くおいでよ。

小松。はい、はい。(庭先に来る) みなさん、御免下さいまし。

瀧口。早速だがこれはお前に返すよ。(烟草入れと烟管を投げ出す)

小松。やつぱりこゝにあつたの。

瀧口。この奥さんが芝居氣を出して、返して下すつたんだ。

小松。まあ、どうも有難うございます。(藤子に向つて會釋する。藤子は目禮する。)

瀧口。そこでこの奥さんが、さつきお前達の話した……それ、例の自動車の一件の奥さんなんだ。

小松。あゝ、あのお清さんの……

瀧口。さうだ。さうだ。そのお清さんの昔のお友達なんだ。ねえ、奥さん。あなたは横須賀に

るお清といふ女を御存じでせう。あなたの方ではお忘れになつても、向うではちやんと覺

えてゐるんです。そのお清といふ女があなたに金を恵んで貰つたと云つて、大變によるこ

んで、この女に話したんです。いゝや、人違ひぢやありません。向うではあなたの左の耳

の下にある小さな疵の痕まで知つてゐるんです。(小松にむかひ) ねえ、さうだらう。

小松。(やゝ氣の毒さうに) えゝ、さうなんですよ。

瀧口。おまへは確にその女から聞いたんだね。

小松。えゝ。(うなづく)

瀧口。奥さん、どうでせう。こんな話が世間に傳はると、まことに困るんですがねえ。

藤子。それであなは何うしようと仰しやるのです。

瀧口。さういふ秘密を知つてゐる者が、尠くもこゝに三人あります。そのお清とこの女とわたく

しと……また外にもあるかも知れませんが。わたくしは繪を描くのが商賣ですから、新聞

社や雑誌社にも大勢の友人があります。

藤子。判りました。もう仰しやるな。あなたの云ふことはもう皆んな判つてゐます。

瀧口。お判りになりましたか。

藤子。判りましたが、そのお話は御免を蒙ります。

鶴子。お母さん。(袖をひく)

藤子。可いから、あなたは黙つておいでなさい。(瀧口にむかひて) あなたは今、繪を描くのが商

鎌倉の一夜

賣だと仰しやいましたね。

瀧口。さうです。

藤子。さういふ立派な御商賣があるなら、それで宜しいぢやありませんか。弱い女を脅迫して何うかしようと云ふやうな、そんな悪い商賣をお始めなさるな。わたくしの御返事は唯それだけでございます。

瀧口。(あざ笑ふ)あなたは大層お強いですなあ。身分のある御婦人は、名譽といふものを大事にしなければなりませんまいが……。その名譽を滅茶々に踏みにじられて、自分の夫の顔にも泥を塗るやうな事件が出来しても、あなたは恐れないと仰しやるんですか。

藤子。その時には又その時の覺悟がありませう。今夜はもうお暇をいたします。さあ、鶴子さん。おいでなさい。

瀧口。どうしてもお歸りになるんですか。では、委細のことは明日あらためて手紙で申上げませう。兎にかくこの芝居はこれで大詰ではありませんよ。わたくしもこのまゝ、すく〜と引込んでしまふほどの安い俳優ではありませんから……。

藤子。お芝居をなさるなら、どうぞあなたお一人で……。わたくしは御相手になれるほどの、立

派な女優ぢやありませんから……。

(藤子は鶴子の手を取りて、奥の襖をあげて去る。瀧口は忘々しさうにあとを見送る。)

小松。(指寄る)中々いつかりしてゐる奥さんねえ。

瀧口。やつぱり猫を被つてゐるんだ。ふだんは上品ぶつた顔をしてゐても、以前が以前だけに、さあとなると中々度胸が据つてゐる。

小松。あなたよりも俳優が上らしいわ。

瀧口。馬鹿をいへ。女に負けてたまるものか。

(奥の襖をあげて、以前の若僧出づ。)

僧。奥さんのお履物は……。お、これか。

(僧は縁に出て、藤子の履物を取つてゆく。)

瀧口。(かんがへて)む、可。あしたは手厳しい手紙を書いて遣る。それで手堪へがなければ、今度は主人の方へ直接に衝突つて行くんだ。

小松。およしなさいよ。そんなことを……。つまらないわ。

瀧口。馬鹿をいへ。

鎌倉の一夜

お芳。どうぞ願ひます。さやうなら。
甲乙。左様なら。

(娘ふたりは上の方にゆき過ぎる。)

お芳。(ちとまりて考へながら)ほんたうに何處へお出でなすつたらう。お二人とも滅多に夜歩きなんぞ爲すつたことは無いんだが……。

(お芳は下の方へ行きかゝる。澤田貞一はステッキを持ち出て出づ。)

澤田。お芳さんぢやありませんか。

お芳。おや、澤田さん。

澤田。今頃どこへ……。買物ですか。

お芳。いゝえ、奥さんとお嬢さんがまだお歸りにならないんですよ。

澤田。奥さんとお嬢さんが……。どこへお出でになつたのです。

お芳。それがよく判らないんですよ。なんでもお嬢さんの方が一足先へお出かけになつて、すぐに其跡から又奥さんがお出でになつたんですから、多分御一緒だらうとは思ふんですが。

澤田。む。。(考へてゐる。)

お芳。いつもは大抵わたくしがお供をするか、それでなければ行く先をちやんと斷つてお出でな

さるんですけれども……。

澤田。今夜はなんとも斷らなかつたのですか。

お芳。ですから、なんだか少し變ですわねえ。

澤田。さあ。(かんがへる。)
しかし外に行くところもないでせうから、兎もかくも海岸の方を探してみたら何うです。

お芳。わたくしもさう思つてゐるんですが……。

澤田。僕も一緒に行きませうか。

お芳。あなたは御用があるんでせう。

澤田。いや、けふは晝から頭が重いので、さつきから目途も無しに唯ぶら／＼散歩してゐるので、すから、どつちの方角へ行つても可いのです。先づどつちへ行きます……こつちですか。

(下のかたを指さす。)

お芳。あなたは今、そつちからいらしたんでせう。

澤田。けれども、濱邊の方を來ませんでしたから、もう一度行つてみませう。

(ふたりは下の方へゆかんとす。下のかたより藤子と鶴子出づ。藤子は眞直にあゆむ。鶴子は頭を垂る)

お芳。あら、奥さんちやございませんか。

澤田。お、鶴子さんも御一緒に……これで先づ安心しました。

藤子。二人揃つてわたくし達を迎ひに来て呉れたんですか。

お芳。あんまりお歸りが遅いので、お迎ひに出ましたら、丁度こゝで澤田さんにお目にかゝつたのでございます。

澤田。どこへお出でになつたのだらうと云つて、お芳さんも心配してゐたのです。

藤子。それはどうも濟みませんでした。すこし外へ寄道をしてゐたもんですから……。

澤田。さうでしたか。(お芳を見かへる。)かうしてお目にかゝれば心配することはありません。では、これでお別れ申します。奥さん、また明日……。(挨拶して行きかゝる。)

藤子。(呼びとめて)あ、すこしお待ち下さいませんか。

澤田。どうぞ御用ですか。

藤子。(お芳を見かへる。)もうこゝへ來てゐれば大丈夫ですから、おまへは一足先へ……。鶴子さんも一緒に……。

鶴子。いえ、あの、わたくしは……。

藤子。ぢやあ、一緒に歸りませう。(お芳にむかひて。)そんならお前だけ先へ……。わたし達もすぐにあとから歸りますから……。

お芳。はい、はい。では、氣をつけてお出でなさいまし。澤田さん、御免ください。

(お芳は上のかたへ引返して去る。藤子はあとを見送る。)

藤子。澤田さんには丁度いゝ所でお目にかゝりました。あなたにはお詫をするところがあるので、鶴子さんにも……。

鶴子。え、わたくしに謝ることが……。わたくしこそお母さんにお詫をしなければならぬ事が澤山あるんです。(聲を湿ませる。)わたくしは心が僻んでゐるもんですから、お母さんの仰しやることを何でも悪く聞いて……。さつきもあんなに逆つたのは、ほんたうに濟まなかつたと云ふことを、今になつてやう／＼氣が附きました。お母さん、どうぞ堪忍して下さい。瀧口さんといふ人があんな悪い人とは些とも知らずにゐました。

澤田。え、瀧口があなたを何うかしたのですか。あの男が……。(迫り問ふ。)

鶴子。澤田さん、あなたにも申譯がありません。危くあの人に欺されやうとしたところへ、お母

澤田。さんが来て救つて下さつたのです。

藤子。(しづかに。)けれども、鶴子さん、あなたにはまだ一つの疑ひが残つてゐるでせう。

鶴子。え。

藤子。さつきのあなたの口吻で、わたしも大抵は察してゐました。あなたはこの澤田さんとわたしとの間に、なにか可怪なことでもあるやうに疑つてゐるのでせうね。(鶴子は黙してゐる。)いゝえ、さうです。さうに違ひないんです。なるほど、譯を知らないあなたの目から見たら、そんな風に思はれることがあつたかも知れませんが、それは大變な間違ひですよ。そのことに就ては、澤田さんにお詫をしなければならぬのです。(澤田に向ひて。)わたくしはあなたに嘘をついてゐました。今日の晝間、あなたがあれほどに仰しやつたのに、わたくしは飽くまでも強情を張り通してゐました。

澤田。あ、では、やつぱりあなたが……。わたくしの恩人でしたか。さうでせう。さうだとはつきり云つて下さい。(なつかしげに摺寄る。)

藤子。さうです。十六年前に横須賀でお目にかつた女は、確かにわたくしに相違ありません。お

話をすれば長いことですが、わたくしもいつまであんな家業をしてゐても仕方がないと思ひまして、新規に生れかはつた料簡になつてある紳士のお屋敷へ奉公に出ました。そこで長い間、正直に勤めてゐたので、御主人にも大變に信用されまして、その旦那様が媒妁をして下さつて、今の浦上家へ後妻に這入ることになつたのです。むかしを思へばほんたうに夢のやうな出世で……。それに付けても自分の身を悔んで、決して人に後指をさゝれないやうにと、せいゝく氣をつけてゐましたが……。(嘆息して。)心の汚れは洗ひ落しても、からだの疵は生涯消えませんが。

澤田。いや、そんなことはありません。むかしは昔、今は今です。あなたが生れ代つた料簡になつて、新しい生活を営んでゐらるれば、立派な紳士の夫人です。それを悪くいふ奴は間違つてゐるのです。

藤子。世間には間違つてゐることが多いのです。したがつて世間といふものが怖しくつてなりません。先刻あなたにむかつて、飽くまでも嘘を云ひ通したのも、やつぱり世間を怖ろしがる心から出たのです。

鶴子。ぢやあ、澤田さんは昔からお母さんを御存じなんですか。

澤田。今から十六年前のことです。親に離れた孤兒が歩き倒れにならうとするところを、この奥さんに救はれたのです。それが今度偶然にめぐり逢つて、わたくしの方から色々おたづね申しても、奥さんはどうしても名乗つて下さらなかつたのです。

鶴子。まあ。

藤子。鶴子さん。これであなたの疑ひも解けたでせう。

鶴子。ぢやあ、さつき二人で複雑つたやうな話をしてゐたのは……。

澤田。けふこそ是非名乗つて頂かうと思つて、わたくしが無理におたづね申してゐたのです。あなたはそれを誤解してゐられたやうですが……。勿論あのときに何もかも正直にお話し申したら、あなたの疑ひも解けたでせうが、これは恩人の秘密です。わたくしの口から何うして云はれませう。

鶴子。御もつともです。ごもつともです。

澤田。あの時は……。あなたに寫眞を返せと云はれた時は……わたくしも實に辛かつたのですよ。

鶴子。濟みません、濟みません。わたくしはどうしたら可いでせう。(泣く。)

藤子。それを附け込んで、あの瀧口といふ人が……。ねえ、鶴子さん、判りましたらう。

鶴子。みんなわたくしが悪かつたのです。ふだんから繼子根性を持つてゐるところへ、あんなことがあつたもんですから……。澤田さんを疑つたり、瀧口さんにだまされたり、お母さんに楯を突いたり……。わたくしはなぜこんなに馬鹿なんでせう。お母さん、澤田さん。どうぞ堪忍してください。(又泣く。)

藤子。譯さへ判ればそれで可いのです。わたくしも昔の卑しい素性を包んで、今まであなたにお母さんと呼ばせてゐたのは、重々悪うございました。で、今夜といふ今夜はわたくしも決心しました。これから家へ歸りましたら、夫の前へ出て何も彼もむかしのことを打明けてしまひます。

澤田。(あわてゝ)けれども、奥さん。それは……。

藤子。いゝえ、かまひません。自分の連れ添ふ夫に隠し立をしてゐるといふのは良くないことです。あの瀧口といふ人は、鶴子さんをだまさうとして失敗したもんですから、今度はきつと慾に轉んで、わたくしの素性を討くとかなんとか、色々の面倒を云つて來るに相違ありません。

澤田。あんな男ですから、口止めとか何とか脅迫がましいことを云つて、金でも強請に來るかも

鎌倉の一夜

二二五

知れません。とんだ男を御紹介しましたなあ。

鶴子。

おめで済むことなら、お母さん。決して御心配には及びますまい。

藤子。

なるほど、今度は金で済むかも知れませんけれども、廣い世間のことです。まだ何處に何を知つてゐる人がるまいとも限りません。今まで世間を怖がつてゐたのは、つまりわたくしの氣が弱いからです。今度のことが好いお手本で、もういつまでも怖がつてゐるはいけません。世間は勿論怖いものです。けれども、怖いと知つて、それを怖がらないやうにならなければ、本當の人間として世の中は渡られませんか。

澤田。

でも、浦上さんはなんにも御存じないのでせう。

藤子。

勿論、夫にも隠してゐました。聞いたら定めて驚くでせうが……。どうも仕方ありません。わたくしは自分の昔のことを残らず夫に白狀してしまひます。そんなものは妻にして置くことは出来ないと思ふことでしたら、今まで夫を欺いてゐた罪を詫びてわたくしは素直に離縁されます。

鶴子。

離縁なんて……そんなことは不可せん。いけません。お父さんが何と仰しやつても、わたくしが無理にお願い申して……。あなたはいつまでも、わたくしのお母さんでゐて下さ

い。(杖にすがる。)

藤子。

(ちつとなつて。)けれども、あなたのお父さんは紳士ですよ。世間にも名を知られてゐる立派な紳士ですよ。名譽といふものを考へなければなりませんからね。

鶴子。

名譽なんぞはどうでも可うござんす。もしお父さんがあなたを離縁すると云へば、わたくしは命賭けで強情を張ります。ねえ、澤田さん。

澤田。

どうぞ無事に済むやうに祈つてゐますが……。

藤子。

たとひ離縁されやうが、されまいが、わたくしはもう何も彼も隠さずに、みんな明らさまに晒け出して、正面を切つて世間を渡ります。悪くいふ人は何とでも云ふが可うござんす。わたくしは自分の力で遣れるところまでは遣つて見せます。

鶴子。

あなたのお覺悟はよく判つてゐます。けれども決して離縁なんて云つて下さるな。わたくしもあなたに救つて頂いた恩返しに、たとひ誰が何と云つても、屹とあなたを庇つて見せます。あなたは何うしてもわたくしのお母さんです。

藤子。

鶴子さん、そのお志だけでも十分です。わたくしは心からお禮をいひます。(涙をふく。)

澤田。

もとより願ふことではありませんが、萬々一浦上さんがどうしても不承知で、奥さんを離

縁するといふやうな事になりましたら、奥さんはわたくしが引取ります。わたくしが一生懸命に働いて屹と御不自由のないやうに御世話をします。鶴子さん御安心ください。

はい。(泣いてゐる。)

鶴子。

さあ、あまり遅くなると不可せんから、もう歸りませう。

藤子。

お父さんに云はずに置く工夫はありませんかねえ。

鶴子。

(頭をふる。)今までのわたくしとは違ひます。もう未練らしいことを仰しやるな。(きつぱり云ひしが、又思ひ出したやうに。)あ、忘れてゐました。(懐中より鶴子の寫眞を取出す。)

藤子。

ん。さつき取返したまふでこゝにありますが……。どうしませうねえ。(鶴子は黙してうつむく。)

鶴子。

はい。(恥しそうに澤田の方をぬすみ視る。)

藤子。

(寫眞を澤田に渡す。)

澤田。

はい。(これもきまり悪さうに受取る。)

藤子。

これでわたくしも清々しました。さあ、行きませう。

鶴子。

(藤子は澤田に會釋して徐かに上の方へゆく。鶴子も會釋して、母に附いて俯向勝にあゆみゆく。)

澤田はたゞすみみてあとを見送る。浪の音きこゆ。

幕

虛
無
僧

大正十四年七月作。

大正十四年九月。歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割——虚無僧空月（市川左團次）愛泉（市川六升）友徳（市川荒次郎）草谷（中村鶴藏）穴倉十之進（市川段猿）穴倉十三郎（市川壽美藏）高村半彌（市川猿之助）半彌の妹お辻（中村福助）など。

第一幕

登場人物——虚無僧空月。愛泉。友徳。草谷。高村半彌、後に虚無僧幽山。半彌の妹お辻。穴倉十之進。穴倉十三郎。神崎次郎平。塚田源藏。和泉屋の若い者與吉。ほかに茶屋の女。参詣の女房。娘。小兒。町人。中間。若侍。僧など。

江戸近在、目黒村。うしろは一面の高き竹藪。上の方に「右、不動道」と彫りたる石の杭が立つてゐる。文化の初年、初秋の暗き夜。

（上の方より大圓寺と記せる提灯を持ちたる僧ひとり出で、下の方に歩み去る。藪のうしろにて尺八の聲きこゆ。向うより高村半彌、廿二三歳の若侍、走り來りてあとを見かへり、人を待つこゝろにて竹藪の奥にかくれる。下のかたより茶屋女おゆき、ぶら提灯を持ちて町人の客ふたりを送り

虚無僧

て出づ。

おゆき。もうこゝでお別れ申します。どうぞ氣をつけておいで下さい。

客 甲。なんほお義理一遍でも、こゝでハイ左様ならはあんまり酷からう。

客 乙。せめてもう少し先まで送つて貰ひたいな。

おゆき。でも、歸りが怖うございますから。

客 甲。こゝらの狸や狐はもうお馴染の筈だ。なんでおまへを嚇かすものか。

客 乙。さあ、来るがいに。来るがいに。

(無理におゆきの手を把つて行かうとするとき、うしろの竹藪ががさくと鳴る。)

客 甲。(みかへる。)おや、竹藪ががさくと云ふぞ。

客 乙。なに、風だらう。

(竹藪再びがさくと鳴る。)

おゆき。あれつ。(客の手をふり拂つて、下のかたへ逃げてゆく。)

客 乙。あいつめ、怖い振をして逃げて行きやあがつた。ずるい奴だ。

客 甲。あいつらこそほんたうに狸や狐だ。はムムムム。

(二人は笑ひながら上の方に去る。風の音して竹藪ががさくと鳴る。尺八の聲きこゆ。半彌は藪から半身を出してうかゞひ、再び隠れる。向うより実倉十之進、五十歳ぐらゐ。中間に提灯を持たせて出づ。)

十之進。よい鹽梅に薄月が出たやうだな。

中間。こゝらは提灯があつても足もとの悪いところでござりますから、薄月の出たのは丁度幸ひ

でござります。

十之進。こゝらは竹藪ばかりで晝でも薄暗いところだ。

(月のひかり薄く出る。二人は話しながら上の方へ行きかゝる時、藪のなかより半彌うかゞひ出て、刀をぬいて先づ中間の提灯をばつさり斬り落す。中間はわつと驚いて下のかたへ逃げ去る。)

何者だ。人違ひするな。

(云ふ間もなしに、半彌は十之進を一太刀斬る。十之進も抜きあはせしが、初度の深手に弱りて忽ち斬り倒さる。尺八の聲きこゆ。半彌はその呼吸をうかゞひて刀を鞘に納め、死骸を藪のなかへ引摺り込む。このあひだに、下のかたより虚無僧空月、三十三歳、天蓋をかぶり、尺八を持ち出て、無言にてこの體を眺めながら近寄る。半彌は死骸を片付け、落ちたる提灯を藪に投げ込みては

つと息、やがて振向くと空月が自分の前に突つ立つてゐるに驚き、再び刀をぬいて空月に斬つてかかる。

空月。え、なにをする。

(半彌は答へず、無二無三に斬つてかゝるを、空月は尺八にて支へる。)

空月。貴様は何者だ。名乗れ、名乗れ。

(半彌はやはり斬つてかゝる。)

空月。人殺しを見付けられたので、口どめにおれを殺さうとするのか。とんでもない奴だ。

(半彌は急いで斬つてかゝるを、空月は尺八にてあしらひながら又云ふ。)

空月。物取りか意趣斬か仔細をいへ。仔細に因つては、おれが助けてもやる。隠まつてもやる。

仔細をいへ。え、云はぬか。

(半彌はまだ無言にて斬込んで来るを、空月は尺八にて防ぎ闘ひ、遂に半彌の刀を打ち落せば、半彌はあわてゝ小刀をぬかんとすると、空月は尺八にてその額を打つ。半彌は額に傷きて倒る。)

空月。まだ手向ひすると、おのれ、ほんたうにぶち殺すぞ。(尺八を振り上げる。)天下御免の虚無僧にむかつて狼藉を働くとはい不埒な奴だ。

(半彌は小刀を抜きかけて躊躇し、息をつきながら黙つてゐる。)

空月。なぜ黙つてゐる。なぜ返事をしない。仔細によつては助けてもやる、隠まつても遣ると云つてゐるではないか。貴様は取りのほせて耳がきこえないのか。

半彌。まったく取りのほせて無禮狼藉、なんとも申譯がござらぬ。(土にひざまづく。)拙者は關東のある藩中の侍、今日この目黒の下屋敷に於いて、上役の者と口論をはじめ、相手は上役を嵩にきて、さんぐに恥しめられ、武士の一分相立ちがたきに因つて、先へまはつて彼が歸りを待ちうけ、御覽の通りに討ち果してござる。そこへお手前がまゐり合はされたので、慌つるまゝに前後の思案もなく……。いや、まことに恐入つてござる。平に御容赦ください。 (土に手をつく。)

空月。(すこしく詞をあらためる。)それでお手前はどうか。これから屋敷へ立歸つて尋常に訴へ出でらるか。

(半彌は黙つてかんがへてゐる。)

空月。それともこの場で切腹めさるか。

(半彌はやはり考へてゐる。)

虚無僧

空月。(笑ひ出す)は、ムムムム。そこで、失禮ながらお手前のお取高は。

半彌。百五十石でござる。

空月。百五十石……藩中としては立派なお身柄でござるな。して、御定府か。お國詰か。

半彌。代々の定府でござる。

空月。では、當地に御親類もござらうな。

半彌。兩親は最早この世に居りませぬが、親類縁者は相當にござる。

空月。(うなづく)本来ならば普化宗門の拙者に對して狼藉無禮を働かれたお手前を唯そのまゝに

は捨て置かれぬ。寺社奉行にも届け出でて屹と吟味をいたすべきではござるが、一切をう

ち明けて詫るとあれば、今夜のことは内分にいたさう。

半彌。はあ。(再び頭を下げる。)

空月。うけたまはれば立派なお身柄、御親類も相當にあるといへば、それらの人々とも御相談の上で、身の進退をお定めなされ。拙者はこれでお別れ申す。

半彌。(云ひすて、空月はしづかに上の方へ行きかゝる。半彌は思案して急に呼びとめる。)

しばらく……。しばらくお待ちくださいな。

空月。(立ちどまる。)なんぞ御用でござるか。

半彌。(躊躇しながら)まことに申兼ねたる儀ではござるが、一旦の意趣によつて、上役の者を暗

撃にいたした拙者の身の上、ほとく進退に窮して居ります。ついでには如何でござらうか。

拙者を御手前の御寺中に當分おかくまひ下さるわけには参るまいか。

空月。(屹となつて)それは以ての外、普化宗門は天下の勇士浪人のかくれ家でござる。一分の意

趣遠恨によつて人を害し、命が惜さに逃げ隠るゝ、左様な卑怯者を隠まふところではござ

らぬぞ。

半彌。はあ。

空月。夜の更けぬうちに何處へか早くお立退きなされ。彼の中間の注進によつて、加勢の者ども

が駆け付けたら何となさる。(云ひかけて向うをみる。)おゝ、こちらへ駆け来て来る建音がき

こえる。

半彌。(おなじく向うを見る。)むゝ、月あかりに四五人の姿……。たしかに屋敷の者でござる。(空月

に)なにとぞ御他言くださるな。

(半彌は左右を見まはして、うしろの竹藪にかくれる間もなく、向うより彼の中間を先に立て、)

神崎次郎平、塚田源藏、いづれも廿二三歳の侍、あとよりも若侍三人つゞいて走り出づ。
(中間に) 穴倉殿が狼藉者に出逢うたのはこの邊かな。

神崎。

中間。

塚田。

(あたりを見まはす。) 併しあたりはひつそりしてゐる。狼藉者を斬拂つて、無事に引揚げられたかな。

(人々はそこらを見まはすうちに、そこに立つてゐる空月を見付ける。)

神崎。

空月。

塚田。

空月。

神崎。

中間。

塚田。

塚田。

虚無僧殿におたづね申す。唯今このあたりで斬合のあつたことを御存じないか。

一向存じませぬ。

まつたく御承知ないか。

存じませぬ。

はてなう。(中間に)これ、確にこゝらであつたか。

どうもこゝらのやうに思はれますが……。それとももう少し先の方であつたかも知れませぬ。

では、兎も角も先へ行つてみようではないか。

神崎。

さうだ、さうだ。

(神崎は先に立ち、塚田その他もみな上の方へ急ぎゆく。空月はあとを見送る。藪をかきわけて半彌がかゞひ出で、これも神崎等のあとを見送りに、やがて空月と顔を見あはせる。)

空月。

この分ではこゝらにうかくしてゐるは危い。宗門の掟には背くことなれど、窮鳥ふところに入るときは獵師もこれを取らずといふ。(思案して)兎もかくも今夜だけはおかくまひ申さう。おいでなされ。

半彌。

では、おかくまひ下さるか。

空月。

今夜だけは急場の凌ぎに。

半彌。

(ほつとして。)かたじけなうござる。

(半彌は思はず進みよれば、空月は天蓋をぬぎて半彌にわたし、これをかぶつて行けといふ。半彌は一禮して天蓋をかぶる。)

空月。

拙者の寺はこの藪のうしろでござるが、月が明るいので人目に立つ。さうして行けば仔細はあるまい。さあ、お越しなされ。

半彌。

はあ。

虚無僧

(空月は尺八を吹きながら上の方へゆく。半彌もつゞいてゆく。月のひかりいよ／＼明るし。)

——幕——

第二一幕

(一)

目黒不動前の茶屋。上のかたは二重屋體、下のかたは土間に大きな茶釜などが掛けてあり。土間の奥は庭づたひに奥の座敷へ通ふころにて、飛び石や植込なども見ゆ。軒には御休み所と記したる行燈と花暖簾をかけ、店さきには花ごさを敷きたる縁臺二脚ほど置く。

(晩秋の午後。上のかたの縁臺には下町の女房が男の兒を連れて腰をかけてゐる。男の兒は桐屋の館の袋をさげてゐる。下のかたの縁臺には町の娘三人が矢張り館の袋や枝柿を持って休んでゐる。茶屋の女おゆきが茶を出してゐる。)

おゆき。 よいお天氣で結構でございます。みな様は御遠方でございますか。

女房。 日本橋の方でございます。

おゆき。 それではなか／＼おきたびれでございます。まあ、御のつくりとお休みなさいまし。

(奥より茶屋の女おそめは線香と花とを持ち出て出づ。)

おそめ。 すぐに御参詣をなさいますか。

娘一。 では、拜んで来ませうか。(三人は起ちあがる。)

おそめ。 おかみさんはお詣りをなさいませんか。

女房。 (笑ふ。) いえ、わたしは不動様だけ拜めば結構、比翼塚へ幾度も御参詣するには及びません。

男の兒。 その比翼塚とか云ふところへわたしも行つて見たいな。(起つ。)

女房。 はて、おまへなどの行くところではない。(娘等に。)おまへさん達は早く拜んでおいでなさい。

娘三人。 あい、あい。

おそめ。 さあ、御案内をいたしませう。

(おそめは先に立ち、娘三人は館や柿を縁臺に置いて、下のかたへ行く。)

虚無僧

女房。

比翼塚は相變らず御參詣がありますかえ。

おゆき。

いつでもお線香の絶えたことはございませぬ。

女房。

芝居や淨瑠璃で名高い権八小紫、その比翼塚がいつも繁昌するのは當りまへかも知れませぬね。

おゆき。

なにしろ目黒の名物になつて居りますから、不動様へ御參詣のお方も一度は屹とおまゐりをなさいます。

(上の方より穴倉十三郎、廿一二歳の若侍、笠をかぶりて出づ。)

おゆき。

お休みなさいまし。

(十三郎は行きかけて思案し、引返して下のかたの縁臺に腰をかける。)

おゆき。

いらつしやいませ。奥のお座敷も明いて居ります。

十三郎。

(笠をかぶりしまゝにて。)茶を一杯くれ。

おゆき。

はい、はい。(茶を持つて来る。)

十三郎。

この近所に虚無僧寺があるな。

おゆき。

はい。すぐそこ竹藪のうしろでございませぬ。

十三郎。

あの寺には虚無僧が幾人ほどゐる。

おゆき。

あのお寺は控へ番所だとか申しまして、むかしは大勢の虚無僧が詰めてゐたさうでございませぬが、唯今では三四人しか住んでゐないやうでございませぬ。

十三郎。

むゝ、三四人……。ほかに此頃になつて新しく來た者はないか。

おゆき。

どうでございませうか。いえ、もう、三四人で澤山でございませぬ。

十三郎。

なぜ澤山だ。

おゆき。

虚無僧といふものは立派な人達ばかりだと聞いて居りましたが、このごろの虚無僧はだんだんに人柄が悪くなりまして、町人や百姓泣かせてございませぬ。

十三郎。

そんなに人を困らせるか。

女房。

(口を出す。)こゝらの虚無僧ばかりではございませぬ。下町の邊へ托鉢にまゐります虚無僧でも、こちらの斷り方が悪いとすぐに店へ這入つて來て、色々のむづかしいことを申すばかりか、持つてゐる尺八で相手を打擲することも度々ございませぬので、まつたく困り切つてしまひませぬ。

十三郎。

それほど諸人が迷惑するのを寺社方ではなぜ打ち捨て、置くのか。心得ぬことだな。

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

虚無僧

おゆき。あの比賣塚の権八もこの虚無僧寺に隠まはれてゐたさうでございます。
十三郎。普化宗門は天下の勇士浪人のかくれ家などと申して、罪人までも隠まうとは不届き至極のことだ。

(下の方よりおそめは先に立ち、以前の娘三人は歸り来る。)

娘一。(女房に)どうもお待たせ申しました。

女房。では、もうすぐに行きませうか。

(女房は起ちあがりておゆきに茶代をわたす。)

おゆき。毎度ありがたうございます。

おそめ。お静にいらつしやいませ。

女房。どうもお邪魔をしました。

(女房は男の兒の手をひき、娘三人も箆や柿を持ちて上のかたに立去る。これと引違へに上の方より虚無僧空月は町人與吉の肩をつかんで引摺つて出づ。與吉は手に尺八と尺八の袋を持つ。)

與吉。もし、それは御無體でございます。

空月。なにが無體だ。貴様は誰に許されてその尺八を持つてゐる。正直に云へ。

與吉。これはあの……。友達から借りたのでございます。

空月。その友達はどこの何といふ者だ。

(與吉は口籠る。)

空月。それ、見ろ。(與吉を突き倒す。)貴様はその尺八を吹いたな。

與吉。いえ、吹いたことはございません。

空月。嘘をつけ、尺八を唯持つてゐる奴があるか。きつと吹いたに相違あるまい。正直にいへ、白状しろ。

(十三郎は黙つて見物してゐる。おゆきとおそめはあとに退つて不安らしく眺めてゐる。)

與吉。なんと仰しやつても、決して吹いた覚えはございません。どうぞ御免くださいまし。

空月。貴様も知つてゐるだらう。尺八は虚無僧のほかに吹いてはならぬものだ。餘人が尺八を吹くときには、總本寺か控へ番所へ届け出て、その許しを受けねばならぬことになつてゐる。貴様はその免許状を持つてゐるか、持つてゐるならば出してみせろ。左もなければ控へ番

所へ一應引立て、行つて、嚴重に詮議の上で寺社奉行へ届け出るからさう思へ。どうぞ幾重にも御勘辨をねがひます。この通り、お詫び申上げます。(土に手をつく。)

與吉。虚無僧

空月。

いや、詫びたぐらゐるでは勘辨はならぬ。さあ、来い。

(空月は與吉の腕をつかんで引立てようとするところへ、上のかたより虚無僧草谷出づ。)

草谷。

おゝ、空月。そいつが何うか致したか。

空月。

こいつ不埒な奴、免許もなしに尺八を吹いてゐるのだ。

與吉。

いえ、吹きは致しませぬ。

空月。

吹かぬといつても、手に持つてゐるのが現在の證據だ。(草谷に)貴公、こいつを引摺つて

ゆけ。

草谷。

さあ、来い、来い。(與吉を引立てる。)

與吉。

どうぞ御免を……。

草谷。

えゝ、来いといふに……。

(草谷は無理に與吉を引立て、下の方に立去る。それを見送りて空月は形をあらため、茶屋の方にむかひて尺八を吹く。おゆきはあわて、錢を紙につみ、盆にのせて持つて出で、會釋して差出す。空月は無言にてその包みを受取り、悠々として上のかたへ行かうとする。十三郎は笠をぬぎて起ちあがる。)

十三郎。

失禮ながら暫く……。

空月。

(みかへる。)なんぞ御用か。

十三郎。

少しくおたづね申したい儀がござるが、お手前の御寺内に近ごろ入門いたした者はござる

まいか。

空月。

(しづかに。)それを訊いてどうなさる。

十三郎。

手前は人をたづねる者でござる。

空月。

いかにも手前の寺中に幽山といふ者が入門いたした。

十三郎。

して、その幽山とやらの俗名は。

空月。

それはお答へ申されぬ。唯今の町人などとは違つて、武家のお手前は定めて普化宗門の掟

を御存じでござらう。一旦この宗門に入る上は、何人の前でも天蓋を取らず、親兄弟にゆ

き逢うても挨拶せず、俗にあるときの名を云はず。かやうな掟のあるからは、幽山はたゞ

幽山と申すのほかはござらぬ。その上の御詮議は無用になされ。

(云ひ捨て、空月は下のかたに立去る。十三郎はあとを見送りて思案し、やがて足早に空月のあと

を追はうとする。)

おゆき。

(聲をかける。)もし、お笠が……。

十三郎。

む。(引返して笠をうけ取り、又こころづいて茶代を置く。)

おゆき。

ありがとうございます。

(十三郎は笠をかへて行かうとする時、茶店の奥より神崎次郎平、塚田源蔵の二人出づ。)

神崎。

十三郎どの。

十三郎。

お。(立ちどまる。)

塚田。

よいところでお目にかつた。

神崎。

(おゆき等に。)こちらには内談がある。しばらく奥へ行つてくれ。

女二人。

はい。はい。

(おゆきとおゆきは奥に入る。十三郎は引返して上の方の縁臺に腰をかけ、神崎と塚田は下のかたに腰をかける。)

神崎。

高村のありかは知れましたか。

十三郎。

このあひだから手をまはして詮議いたすところ、高村半彌は親類縁者のもとへ尋ね寄りし様子もなく、さりとて遠國へ出奔いたしたとも思はれず。おそらく姿をかへて江戸市中か

神崎。

近在に隠れ忍んでゐることと思ふにつけ、もしや虚無僧寺などに隠まはれてゐるやも測られずと、今日こゝらへ尋ねてまゐつたのでござる。

塚田。

上役の十之進どのを問討にして逐電したる高村半彌は、重々の不埒者として殿様の御立腹強く、其方共も十三郎の助力して、一日も早く彼めのありかを尋ね出せとの殿命でござれば、めいゝに手分けをして、毎日探索いたしてゐれど、いまだその行くへが判りませぬ。燈臺下暗しといふ譬もあれば、十之進どのが討たれたる目黒のあたりを今一應探索いたさうと存じて、かやうに連れ立つてまゐりしところ、丁度こゝでお目にかつたは不思議でござつた。唯今うけたまはれば虚無僧寺を御詮議とあるが、それには何かお心當りのことでもござるか。

十三郎。

別に心あたりもござらぬ。ふと思ひついたまゝに参つたのでござるが、恰もこゝで虚無僧にゆき逢ひ、それとなく聞きあはせましたるに、このごろ彼の寺に幽山といふ者が新に入門いたしたさうでござる。普化宗門の掟と申してその俗名を明しませぬが、若しやそれが彼の高村半彌ではあるまいかとも思はれます。

神崎。

なるほど、それで思ひあたることござる。十之進どの問討の注進をきいて、われゝが

塚田。

すぐに駆けつけし時、竹藪のほとりで一人の虚無僧に出逢ひました。何をたづねても存ぜぬ知らぬと申してゐたが、あるひは彼めが高村をかくまつたのかも知れませぬ。では、これからすぐに参らう。(起ち上がる。)

十三郎。

なるべくは召捕つてまゐれといふ仰せではござるが、拙者に取つては親のかたき、萬一手にあまらば斬つて捨つる。おのくも左様御承知くださいませ。

神崎。

御もつともでござる。かれが尋常に繩にかゝれば格別、萬一手向ひいたすときは、踏み込んでお仕留めなされ。

十三郎。

立騒いで取逃してはなりませぬ。拙者が先づ案内して様子を探りますれば、御兩所は小陰に忍んでお見張りをねがひます。

二人。

承知いたしました。

(十三郎を先に、神崎と塚田もつゝいて下のかたに立去る。奥よりおゆきとおそめ出て来りて、縁臺の上の茶碗や煙草盆などを片附ける。)

(11)

虚無僧寺。

古びたる二重屋體にて竹縁あり。正面の上の方は壁にて、それに天蓋が掛けてあり。經机、經卷などもあり。つゞいて出入の襖二枚、下のかたは壁にて、折りまはして竹の半窓あり。庭の上のかたには井戸ありて、秋の柳が掩ひかゝれり。下のかたには粗き四目垣をゆひて、低き枝折門あり。門の外には熟したる柿の大樹あり。家の左右は高き竹藪に圍まる。

(虚無僧愛泉、三十五六歳の世馴れたらしい男。おなじく友徳、二十五六歳の武張つた男。いづれも尺八をそばに置き、貧乏徳利や小皿をならべて、茶碗酒をのんでゐる。下のかたの爐には蚊いぶしの烟がほの白く颯つてゐる。うすく水の音。奥には尺八の聲きこゆ。)

友徳。

愛泉。

朝晩はもう冷々して來たのに、どうも蚊蚊がひどいことだな。目黒の名物、竹藪に取りまかれてゐるのだから、雪のふるまでは蚊蚊の絶え間は無しだ。とは云つても全くひどい。もう少し蚊いぶしを焚いてくれ。

友徳。

愛泉。

人使ひのあらぬ奴だな。兄弟子にむかつて口答へをすると、容赦はせぬぞ。(尺八をふりあげる。)

虚無僧

友徳。 そんな火吹竹が怖くつて天下の勇士が一日でもこゝに菓を食つてゐられると思ふか。

愛泉。

相變らず大きなことを云ふ奴だ。はゝゝゝ。

愛泉。

(友徳は蚊いぶしを焚き付ける。奥には尺八の聲つゞきてきこゆ。)

友徳。

(奥をみかへる。) あいつ、朝から晩までひうく吹いてゐる。うるさい奴だな。

愛泉。

尺八が下手では虚無僧にはなれないと思つたからな。

友徳。

(笑ふ。) 誰でも當座はそんなものだが、おれたちは唯の藝人ではない。尺八が上手だから

友徳。

と云つて、看主にも院代にもなれるものではないのだ。(尺八を把る。) こんなものは商賣の

友徳。

看板に持つてゐればいゝのだ。しかし人をなぐるには都合がよく出来てゐるな。(友徳を打

友徳。

つ眞似をする。)

友徳。

えゝ、無禮を働くな。そんな手間に藪蚊でも逐つてくれ。

愛泉。

いくら虚無僧寺でも尺八で藪蚊を逐ふ奴があるものか。(尺八を置いて、手酌で飲まうとして

友徳。

舌打ちする。) やれ、やれ、

友徳。

へもとの座に戻る。) 酒はもう無いか。

愛泉。

この通りだ。(徳利を振つてみせる。)

友徳。

よし、よし。(奥にむかつて呼ぶ。) これ、幽山、幽山。鳥渡来い。

(尺八の聲やむ。高村半彌、今は幽山と名乗り、虚無僧のすがたにて尺八を持ち、奥より出づ。その額には疵のあとあり。)

愛泉。

大層勉強するな。

半彌。

新規に入門いたしました者でござれば、せいゝく修業を致さなければなりません。

友徳。

いくら修業でも餘りに氣を詰めては身體の毒だ。われゝくと一緒に飲むがいゝぞ。(茶碗を

出す。)

半彌。

折角ながら手前はもはや禁酒いたしました。

友徳。

なぜそんな不自由なことをしたのだ。

半彌。

先夜のあやまちも所詮は酒の上から起つたことで、今更重々後悔して居ります。殊にこの

宗門でも酒は三獻を過ぐべからずと戒められてある程でござれば、かたゝく禁酒ときめま

した。

友徳。

どうも窮屈なことだな。普化宗門は天下の勇士のかくれ家といふことは貴公も知つてゐる

虚無僧

答だ。天下の勇士が酒を飲まぬといふことがあるものか。三獻が五獻となり、十獻となつても、大目に見るのがこの宗門の習だ。遠慮なく飲まつしやい。(茶碗を突きつける。) それとも貴公、われ／＼に恥辱をあたへるのか。

半彌。いや、お手前たちは御勝手次第、拙者だけは堅く禁酒ときめましたれば、以後は左様御承知ください。

友徳。む。わかつた。さては貴公、われ／＼と一緒に酒をのむと、いつでも酒を買はされると云ふので、俄かに禁酒と云ひ出したのか。いや、さうだ。さうだ。(屹となつて茶碗を下に置く。) これ、幽山。庭へ出て貰はう。

半彌。え、庭へ出るとは……。

友徳。天下の勇士が恥辱をあたへられて、その分では済まされぬ。これから貴公と勝負して刺しちがへて死ぬばかりだ。

半彌。え。

友徳。さあ、庭へ出ろ。(立ち上る。)

愛泉。これ、これ、友徳。貴公はどうも氣が暴くて困る。しかし幽山もよくない。生來の下戸な

半彌。らば兎も角も、相當に飲める口を持つてゐながら、人のさした茶碗を無愛想に断るといふのも穩かでない。断るなら断るやうにして、なんとか丸く済むやうにしたら何うだな。

半彌。(うなづく。) わかりました。では、拙者がお相手をいたさぬ代りに、少々ばかりの酒を買ひませう。

愛泉。いつも／＼貴公のふところを痛めて氣の毒だが、實は徳利がこの通りだ。(徳利を振つて見せる。) なにしるこの寺も評判がわるいので、どこの酒屋も現金でなければ持つて来てくれないので困る。これ、友徳。それで天下の勇士も文句はあるまい。いつまでも膨れつ面をしてゐるな。和睦しろ。和睦しろ。はムムムムム。

友徳。(半彌はふところの紙入れを出し、銀一朱を紙にのせて愛泉の前に置く。)

半彌。輕少ながらこれで宜しくおねがひ申す。

愛泉。いや。それでは貰つて置く。(友徳と顔を見あはせて。) 一朱あれば酒も肴も買はれる。貴公、日の暮れないうちに早く行つて来い。

友徳。(銀をうけ取る。) では、和睦してすぐに行つて来よう。

愛泉。

(友徳は天蓋をかぶりて尺八を持ち、片手に徳利をさげて下の方へ出てゆく。)

半彌。

どうもひどい蚊だ。(半彌に)すこし蚊いぶしをたのむぞ。

愛泉。

はい、はい。(起つて蚊いぶしを焚く。)

半彌。

枝を炙べるばかりではいけない。煽いでくれ。

愛泉。

はい、はい。(腰の扇を把り出して煽ぐ。)

半彌。

そんなものでは埒が明かない。これでどしく煽がつしやい。(溢團扇を投げてやる。)

愛泉。

はい、はい。(溢團扇を把りて煽ぐ。)

愛泉。

貴公もそれが修業の一つだ。尺八を吹いてゐるばかりが能ではない。水を汲み、米をとき、風呂を沸かし、拭き掃除をする。それがみんな貴公の務だ。

半彌。

委細心得て居ります。

與吉。

(下のかたより草谷は與吉を引立て、出づ。)

草谷。

どうぞ御勘辨をねがひます。

草谷。

幾たびも同じことをいふな。唯あやまつて料簡することではないのだ。さあ、来い、来い。(無理に内へ引摺り込む。)

愛泉。

草谷。そいつがどうしたのだ。

草谷。

この通り、尺八を持つてゐる。

愛泉。

なるほど、こいつ不埒な奴だ、きつと詮議をせねばならぬぞ。

與吉。

かうなれば何も彼も正直に申し上げます。わたくしは京橋靈岸島の酒問屋いづみ屋の店の

愛泉。

ものでございませう。

半彌。

(半彌に)それ、書きとめて置かつしやい。

草谷。

はい。(半彌は棚より硯箱と紙を持ち出して来る。)

與吉。

先づ貴様の名をいへ。

草谷。

與吉と申します。

愛泉。

(半彌は筆を把つて書きとめる。)

與吉。

そこで、どうしてその尺八を持つてゐるのだ。貴様が吹くのか。

愛泉。

いえ、若主人の幸次郎が吹くのでございませう。先日あつらへました此の尺八がどうもい、

與吉。

音が出ないと申しますので、今日笛師を同道いたしましたして、この目黒の方角へ笛竹を見に

草谷。まゐりましたのでございます。

與吉。やはり何うも思はしい漢竹がないと申すことで、途中で別れて歸りました。

愛泉。よし。明日にもあらためて主人の店へ掛合に行く。それまでは貴様を留め置くからさう思へ。

與吉。え、わたくしを歸しては下さいませんか。

愛泉。あたりまへのことだ。(草谷に)その尺八を取りあけて、こいつを奥へ押込めて置け。(半彌に)貴公も手傳へ。

草谷。さあ、立て。

與吉。あゝ、もし、お待ち下さいまし。わたくしが此のまゝ留め置かれましたは、主人方でも定めて心配いたすことゝ存じます。いづれ主人同道で、あらためてお詫にまかり出ませうから、今日のところは何うか御勘辨を……。なにぶんお願い申します。

(愛泉と草谷は顔を見あはせる。)

愛泉。それほど頼むならば歸してもやらうが、寺の掟だ。貴様の身の代金を置いて行け。

與吉。身の代金と申しますと……。

草谷。わからぬ奴だな。貴様を歸してやる代りに、相當の金を置いて行けと云ふのだ。

與吉。(呑み込んで)はい、はい。判りました。(紙入れより二分金を出して紙に包む)何分にも出先のこと持合せがございません。まことに輕少ではございますが、どうぞこれで御勘辨を……。

草谷。(受け取りてあらためる。)むゝ、二分か。

愛泉。人間ひとりの身の代がたつた二分では安いものだが、出先とあればよんどころないでは、今日のところは赦してやらうか。

與吉。ありがとうございます。

愛泉。但しこれで済んだのではない。あしたは早々に主人同道で挨拶にまゐれ。さもないと當分から打揃つて掛合にゆくぞ。よく覚えてろ。

與吉。はい、はい。では、どなたも御免下さいまし。

(與吉は早々に挨拶して、逃げるやうに下の方へ立去る。)

愛泉。いくら酒が高くなつても、二分あれば當分は飲める。あいつは何處で見つけたのだ。

虛無僧

草谷。

不動前の茶店の前で空月が見つけて嚇かしてゐるところへ、丁度おれが通りあはせたので、すぐに受取つて連れて來たのだ。

愛泉。

やつぱり空月は眼が疾いな。は、ム、ム、ム。

(半彌は始終あきれて眺めてゐる。)

草谷。

(縁にあがる。) 酒も酒だが、夕飯の支度はいゝかな。

愛泉。

(半彌に。) これ、幽山。今も云つて聞かせた通りだ。このごろは日が短くなつたから、そろそろ夕飯の支度もしなければならぬ。水でも汲んで米を磨ぎなさい。

半彌。

かしこまりました。米はいつもの通りでよろしうござるか。

草谷。

毎日のことだ。判つてゐるではないか。

(半彌は奥に入る。)

草谷。

見たところ、まんざらの馬鹿でもなさうだが、どうもほんやりしてゐる奴だな。

愛泉。

あれでも屋敷にゐれば百五十石取りの若旦那だ。命が惜しいばかりに、こゝへ駈け込んでおれ達に追ひ使はれてゐる。かんがへてみれば可哀さうにもなるよ。

草谷。

あいつが無事に生きてゐられるのも俺達のおかげで、こゝの寺を追ひ出されたらすぐに縛

愛泉。

り首だ。それを思へば、どんなに追ひ使はれても文句の云へた義理ではあるまい。それだからさつきも友徳にねだられて、酒を買つたよ。ほんたうにあいつは何をしてゐるか、遅いことだな。

(下のかたより半彌の妹お辻、十七八歳、風呂敷包みをかゝへて出て、そつと内をうかゞつてゐる。)

草谷。

友徳は酒をかひに行つたのか。

愛泉。

幽山から一朱貰つて、酒と肴を買ひに行つたのだ。

草谷。

あいつ一人で飲んで來はしまいな。

愛泉。

ふだんから天下の勇士と力んでゐる奴だ。まさかそんなこともあるまい。萬一そんな横着をすれば、袋叩きにして放逐するまでのことだ。

(風の音して、落葉ふる。庭の上の方より半彌は片だすきにて米かし桶を持ち出て、井戸ばたへ來て水を汲み、米を磨ぎはじめ。お辻は外から見て、聲をかけようとして躊躇してゐる。)

愛泉。

これ、幽山。氣をつけて磨いでくれ。きのふの飯には石が這入つてゐたぞ。

半彌。

はい、はい。

(半彌はしきりに米をといである。向うより空月出づ。それに氣がついて、お辻はあわて、柿の木のかげに隠れる。空月は内に入る。)

愛泉。やあ、友徳かと思つたら空月か。

空月。(草谷に。)さつきの奴はどうした。

草谷。主人の店の名を聞ききたした上で、身の代金を取つて歸してやつた。

空月。それで幾ら取つた。

草谷。二分よ。

空月。たつた二分か。(舌打ちして。)まあ、いゝわ。店の暖簾がわかつてるれば、又あらためて掛

半彌。合にゆく法もある。(半彌に。)やい、幽山。役僧が歸つて來たのに挨拶をしないか。

半彌。(氣がついて出迎へる。)おゝ、お歸りでござりましたか。

空月。早く水を汲んで來い。なにをほんやりしてゐるのだ。

半彌。はい、はい。

(半彌は阿伽桶に水を汲んで來る。空月は縁に腰をかけて草鞋をぬぐ。)

空月。さあ、洗つてくれ。

(空月は足をつき出せば、半彌は洗つてやる。外にはお辻が再び出て、内の様子なうかつてゐる。)

そのうちに半彌はふと氣がついて表をみかへる。)

空月。これ、傍見をしないでよく洗へよ。どうも貴様はうつかりしてゐていけない。そんなことでは虚無僧寺の飯を食つて、浪人仲間の附合は出來ないぞ。しつかりしろ。

(空月は半彌の肩を蹴る。半彌は倒れる。)

空月。貴様はその額の疵を忘れたのか。性懲りのない奴だ。

(空月は尺八をふりあげる、お辻は思はず内へ駆け込む。)

お辻。あゝ、もし、どうぞ御勘辨をねがひます。

空月。誰だ、誰だ。おまへは……。

早谷。おゝ、それは幽山の妹だ。

お辻。(草谷に會釋する。)昨日は失禮をいたしました。

草谷。(空月を指して。)これが役僧の空月殿だ。御挨拶をさつしやい。

お辻。初めましてお目にかゝります。わたくしは高村半彌の妹、辻と申すものでござります。兄

が一方ならぬ御恩を受けて居りますさうで、幾重にもお禮を申し上げます。

虚無僧

空月。

拙者はこの控へ番所をあづかる役僧の空月でござる。

愛泉。

拙者は番僧の愛泉、お見識り置きください。

空月。

して、今日は何しにおいでなされた。

お辻。

兄に逢ひにまゐりました。

空月。

一旦この宗門に入るからは親兄弟に逢つても挨拶せぬといふ、普化宗門の掟を御存じないか。折角ながらお歸りなさい。

お辻。

はい。(躊躇してゐる。)

半彌。

空月殿が云はれる通りだ。おれの無事を見とゞけたら歸つてくれ。

お辻。

きのふこの草谷殿がお越しなされました……。

空月。

はて、ことばをかはしてはならぬと云ふに……。 (草谷に) 何か用があるならば、貴公が表へ出て聞くがよい。

草谷。

(こゝろ得て) さあ、兎も角も表へおいでなされ。

お辻。

でも、兄にすこし聞きたいことがござりまして……。

空月。

(叱る。) えゝ、ならぬといふに……。 それ、早く連れてゆけ。

草谷。

さあ、さあ、おいでなされ。

空月。

(草谷は無理にお辻を表へ押出して、家のうしろへ連れてゆく。)

空月。

幽山。貴様は早く飯の支度をしろ。

空月。

(半彌は米かし桶を持ちて上のかたに去る。空月は天蓋をかけて、あぐらをかく。)

空月。

そこで今の二分はどうした。酒でも買ったか。(云ひながら徳利を振つてみる。) なんだ空かばかくしい。

愛泉。

酒は友徳が買ひに行つてゐるのだ。

空月。

(表をみる。) ところで、あの女は幾ら持つて来たかな。

愛泉。

たびくの無心だから幾らも持つて来まいと思ふが……兄きの不首尾から屋敷にもゐられなくなつて、麻布の親類にあづけられてゐると云ふことだが、よく思ひ切つて出て来たな。

空月。

それはやつぱり兄妹の人情だらう。そこが又こつちの附目で、このあひだから草谷を使に遣つて、最初に入門金として十兩取る。それから何の彼のと名をつけて、幽山には内證

空月。

で二兩三兩と七八度も引出して來てゐる。そんなことが兩方に知れると、これから續けて

空月。

虚無僧

金を引き出すのに面倒だから、なんでもあの兄妹ふたりを逢はせないに限る。おれの留守にあの女がたづねて来ても、宗門の掟を楯に取つて屹と断つて歸してしまへ。

愛泉。

まつたくあの女の顔を見たときには、おれも些と拙いと思つたよ。

空月。

いや、尋ねてくるといへば、あの女よりもつと劍呑な奴がこゝらをうろ付いてゐるらしいぞ。

愛泉。

劍呑な奴とは……もしや幽山の屋敷の奴等では無いか。

空月。

なんといふ奴か知らないが、不動前でおれに聲をかけた若い侍は、どうもあいつを尋ねてゐるらしい。一旦こゝへ隠まつたものを迂濶に人手にわたしては、虚無僧寺の名折れになる。慾得は別にして、あいつを庇つて遣らなければならぬ。その積りで皆んなも油断するなよ。

愛泉。

む、それは油断がならない。當人は勿論だが、ほかの奴等にもよく云ひ聞かして置くことだ。

友徳。

こゝへ歸つて来る途中で、三人づれの若い侍がそこらをうろついてゐるのを見かけたが、

(下のかたより友徳は尺八を腰にさし、徳利と竹の皮包みを持ちて足早に出づ。)

どうも幽山の屋敷の奴等がこゝに居ることをかき付けたらしいぞ。

空月。

それを今も云つてゐるのだ。どんな奴等が押掛けて来ても、決して幽山を渡してはならないぞ。

友徳。

それは勿論のことだ。一旦この寺に這入つたものを迂濶に他人にわたしては、天下の勇士の名折れになる。すぐに手わけをして口々の固めが大切だぞ。

愛泉。

まあ、騒ぐな。なにしろ誰かが押掛けて来た時に、酒や肴などが列べてあつては工合が悪い。兎もかくも奥へ運び込んでしまへ。

空月。

む、奥で飲みながら敵を待つとしようか。

愛泉。

酒で勇氣をつけて置けば、何十人押掛けて来ても怖るゝことはない。かういふ時には酒だ酒だ。

友徳。

おれは酒よりも腕が鳴つてならない。今にも敵勢が押寄せてくるかと思ふと、なんだか武者震ひがするやうだ。

空月。

(笑ふ。)まあ、いゝからおれにまかしておけ。
(愛泉と友徳は酒や肴を奥へ運んでゆく。空月は縁に出て表を見る。)

空月。

草谷めは藪蚊に食はれながら何をしてゐるのだ。草谷、話が済んだら早く這入れ。

（云ひすて、空月は壁にかけた天蓋を取りて奥に入る。庭の上の方より半彌出で、そこに人のゐないのを見て門口に來り、表をのぞく。落葉して、秋の日は暮れかゝる。家のうしろよりお辻と草谷出づ。草谷は風呂敷包みを持つ。）

草谷。

この品々は確かに幽山に渡します。その積りでお歸りなされ。

お辻。

どうでも兄には逢はれませぬか。

草谷。

（躊躇して。）折角ながら宗門の掟で致方がござらぬ。

お辻。

あの、鳥渡の間でよろしいのでござりますが……。

草谷。

（お辻の顔をながめながら。）拙者ひとりならば何とかお取計らひも致すが……。まあ、あきらめてお歸りなされ。

お辻。

では、残念ながらこれで戻りませう。

草谷。

こゝらは路がさびしい。やがて日も暮れかゝる。若い美しいお女中のひとり歩きは不用心

でござる。拙者がそこらまでお送り申さうか。

お辻。

いえ、決してそれには及びませぬ。

お辻。

（お辻は會釋して下のかたへ行かうとして、あとを見かへる時、半彌と顔をみあはせる。）
（引返して來る。）兄さま、わたくしはもう戻ります。どうぞおからだを御大切に……。

空月。

（奥にて空月の呼ぶ聲きこゆ。）

草谷。

草谷、草谷、好加減にして内へ這入れ。

草谷。

うるさく呼ぶな。（お辻に。）これ、長話しをしてはなりませんぞ。

半彌。

（草谷は枝折戸のかき金をかけ、半彌とお辻を内と外とに隔て、置いて、幾たびもお辻を見返りながら奥に入る。）

半彌。

（内から語る。）おまへは其後どうしてゐる。

お辻。

（外から。）あれ以來、御屋敷にもゐられなくなりまして、麻布のをち様のところにお預けとなつて居ります。

半彌。

とんだ心得違ひからお前にも苦勞をかけて氣の毒であつた。併しまあこゝに隠れてゐれば

お辻。

どこからも手の這入る氣づかひはないから安心してくれ。

半彌。

あなたの額の疵は……。

お辻。

（額をなでる。）む、これか。これもおれが悪かつたのだ。今見てゐれば、おまへは何か風

半彌。

虚無僧

お辻。 呂敷包みのやうな物を持つて来たな。

秋もだん／＼に末になりました、あさ夕は定めてお冷えなさらうと存じまして、お小袖を二三枚持つてまゐりました。

半彌。 それはよく気がついて呉れた。それからお前がさつきの話しでは、草谷殿が昨日たづねて行つたか。

お辻。 はい。きのふも麻布へ見えまして、幽山も修業中は托鉢にも出られず、毎日の小遣ひにも不自由してゐれば、三兩ばかり届けてくれとのことでござりましたが、何分にもたび／＼のことでござりますので……。

半彌。 なに、たび／＼のこと。草谷がそんなにたび／＼尋ねて行つたか。

お辻。 はじめに入門金とか申しまして、あなたの御手紙を持つて、十兩のお金を受取りに参られました。

半彌。 それはおれも知つてゐる。

お辻。 それから三月ほどの間に、大抵十日目に一度はたづねて参られまして、その都度に二兩三兩づつお渡し申して居りました。

半彌。 (案外らしく)む、十日に一度づつは金を取りにゆく……。そんなことがあつたのか。

お辻。 以前の身の上とは違ひまして、わたくしにもなか／＼工面がなりません。さりとて叔父さまに打ちあげましたら、ふだんから物堅い御氣性、すぐにもこゝへ踏み込んでお出でなされうも知れませぬので、何をいたすにもわたくしの胸ひとつ、よんどころなく手まはりの道具や、櫛かんざしなどを竊と賣り拂ひまして……。

半彌。 いや、それは些とも知らなかつた。こゝへ來てから毎日の拭き掃除、臺所はたらき、水を汲むやら、米を磨ぐやら、みんな俺ひとりで勤めてゐる。それは自分の心柄と我慢も辛抱もしてゐるが、妹のお前にまでそれほどの苦勞をかけてゐることは、今まで夢にも知らなかつた。普化宗門は勇士浪人のかくれ家、義に因つて人をかくまふものと思つてゐるに……。(腹立たしげに奥をみかへる) いや、やつぱり俺が悪かつたのだ。おれが卑怯であつたからだ。さうと知つた以上は、なんとか考へ直さなければなるまい。

お辻。 でも、迂濶にこゝをお立退きなされたら、あなたのお身が危いではござりませぬか。

半彌。 さあ。(思案してゐる)

お辻。 もし、兄さま。お金のごことはわたくしが何とかして工面をいたしますから、もう少し詮議

の弛むまでは、何事も辛抱してこゝに隠れておいでなされませ。

半彌。おれは辛抱するにしても、唯つた一人の妹のお前にまでそんな苦勞をさせてはならない。どう考へてもおれが間違つてゐたのだ。

お辻。そんなことを仰しやつて、決して短氣なことをして下さりませ。くどくも申す通り、ここを出たらあなたのお身が危いのでござります。

半彌。それを思つて我慢してゐるのだが……。どうも困つたな。

(半彌はやはり思案してゐる。お辻は向うをみて、俄にあわてる。)

お辻。(小聲で。)もし、兄さま。

半彌。なんだ。

お辻。向うから実倉の……。十三郎どのが……。

半彌。なに、実倉の十三郎が来た……。(これも慌てる。)おまへも見られてはいけない。兎もかくも隠れる。早く隠れる。

お辻。(半彌は枝折戸のかき金をはづして、お辻を内にひき入れる。)這入つてもよろしうござりますか。

半彌。よくつても悪くつても仕方がない。まあ、こつちへ来い。

(半彌は妹の手をひきて、上のかたに隠れ入る。奥より草谷出づ。)

草谷。む。あの女はもう歸つたか。いつ見ても好い女だな。

(草谷はうっかりと外をながめてゐる。向うより実倉十三郎、あとより神崎次郎平と塚田源藏出づ。)

十三郎は門口にて二人にさゝやき、神崎と塚田は下の方に去る。

十三郎。(門口にて。)御免ください。草谷が黙つてゐるので再び呼ぶ。御免下され。

草谷。(氣がついて。)はあ、どなたでござる。

十三郎。拙者は東國の藩中、実倉十三郎と申す者でござるが、當寺内に同藩中の侍、高村半彌が忍んで居りませうな。

草谷。さあ。(返答に澁つてゐる。)

十三郎。たしかに忍んで居る筈でござるが……。

(奥より友徳出づ。)

友徳。(草谷に。)待て、待て。おれが應對する。(縁を降りて出る。)お手前にはそれを詮議してなんとなさる。一旦この寺内に入込んだ以上は、親類縁者たりとも御對面は相成りませぬぞ。

虛無僧

十三郎。

そこを折入つておねがひ申す。なにとぞ一目お逢はせ下され。高村半彌は姿を變へてこの寺内に隠れ忍んでゐることを確かに突きとめて詮議にまゐつた。勿論、普化宗門の掟として、一旦こゝに入込んだものを隠まはるゝは御もつともござるが、高村半彌を召捕つてまゐれといふ主君の下知、また二つには彼は拙者の父のかたき、かたゞその分には差措かれませぬ。右の事情をお察しあつて、是非ともかれをお引渡しくだされ。

友徳。

(いよゝいかめしく) さう聞く上は猶更のこと。たとひ主君の下知であらうが、お手前のかたきであらうが、天下の勇士のかくれ家へ一足たりとも踏み込むことは相成らぬ。早々にお引取りください。

十三郎。

これほどにお願ひ申してもお聞きわけ下さらぬか。

友徳。

くどい、くどい。押して通らば我々が勇士の腕前をみせ申すぞ。

十三郎。

む。

友徳。

(十三郎は焦れて友徳を押し退け、つか／＼と奥へ踏み込まうとする。) え、怪しからぬ奴だ。

(友徳は十三郎をひき戻さうとする。草谷も尺八にて十三郎に打つてかゝる。十三郎は掻きまくりながら争ふ。下のかたより神崎と塚田うかゞひ出で、十三郎を助けんとて庭へかけ込む。奥より空月は天蓋をかぶり、尺八を持ち出て出づ。)

空月。

え、さわがしい。何事ぞござる。

(これにて皆々すこしく鎮まる。)

空月。

見れば先刻のお侍、表立關より案内も乞はず、なんで通用門から無作法に踏み込みめされた。返答によつては其儘には済まませぬぞ。

十三郎。

唯今も申す通り、當寺内にかくまひある高村半彌は拙者の父のかたき、且は主君の下知によつて唯今詮議にまゐつたのでござる。たとひ普化宗門たりとも、不忠不義の侍を隠まはるゝ法はござるまい。尋常にかれをお渡し下され。

神崎。

われ／＼も主君の指圖によつて、十三郎どのゝ加勢にまゐつた。

塚田。

強ひておかくまひなさるならば、家探しいたしても詮議せねば相成らぬ。

神崎。

それとも素直に高村をお渡しなさるか。

空月。

なに、家探しする。(屹となつて) して、それは誰の許しを受けられた。

十三郎。

主君の許しを受けて、父のかたきを詮議にまゐつた。

虚無僧

空月。 え、いつまでも同じことを……。お手前の御主人はどこの國のなんといふ大名かは存ぜぬが、われらは大名などの支配を受くる身分でない。公儀の寺社方の支配でござるぞ。寺社奉行のほかには町方でも手さしのならぬ虚無僧寺へ、めつたに踏み込んで後悔めさるな。

十三郎。 む、。

空月。 家探しは愚かなこと、こゝへ一足でも踏み込んだが最期、この控へ番所より總本寺へとかけ出で、お手前等の主人を相手取つて寺社奉行へ訴へたら、何萬石の家に瑕が付きませうぞ。

空月。 (十三郎等三人も顔を見あはせる。)

東照宮より觸れ渡されたる慶長十九年の掟書を御存じないかと、立歸つて主人に傳へられ

十三郎。 (思案して)この上は致方もござらぬ。残念ながら今日はこのまゝ立歸つて、あらためて又お掛合にまゐるでござらう。

草谷。 お、いつでもお出でなされ。下世話にいふ一昨日来いとは此事でござる。

空月。 (わざと制する)これ、歴々のお侍に對して無禮を申すな。(あざ笑ふ)

神崎。 でも、見すく隠まつてあるものを……。

十三郎。 いや、一圖に燥るところでござらぬ。兎も角もこのまゝ、この儘。

友徳。 では、無禮をわびてお引取りなさるか。

十三郎。 (残念ながら丁寧に會釋する) いかにも失禮の段、いくへにも御容赦くださいされ。

(神崎と塚田もよんどころなく會釋して、十三郎と共に下のかたへ立去る)

空月。 (笠をぬぐ)なんにも知らぬ國侍、今更のやうにおどろいて、尻尾をまいて歸つて行つた。馬鹿な奴等め。は、は、は、は。

友徳。 いや、小氣味のよいことであつた。これで勇士の面目が立つたと云ふものだ。

(庭の上のかたより半彌は大小をかへて足早に出で来るを、お辻が支へながら出づ。あとより愛泉も追つて出づ。)

お辻。 まあ、お待ちなされませ。

愛泉。 これ。うろたへて何うするのだ。待て、待て。

半彌。 いや、止めるな。止めてくださるな。拙者も侍。いつまでも卑怯者ではゐられぬ。十三郎

のあとを追つて、かれの父を討つたる仔細を明白に云ひ聞かせ、かたきと名乗つて尋常に勝負いたす。

お辻。相手は三人、あなた一人では逆も勝負はなりませんまい。かならず燥まつて下さりますな。

半彌。え、放せ、放せ。

空月。

（半彌は振切つて行かうとするを、お辻は又遮る。）
幽山。どこへゆく。今聞いてるれば、あの侍どもの跡を追つて行つて尋常に勝負をすると……さりとて飛んでもない奴だ。相手はどんな腕前か知らぬが、兎も角も血氣さかりの若い奴が三人も揃つてゐるところへ、貴様のやうな意氣地なしが唯つた一人で飛び出して行つてどうするのだ。

半彌。

（せいて。）もう斯うなつたら命は惜まぬ。え、邪魔するな。

空月。

（半彌はお辻をつき退けて門口へ行かうとすれば、空月は縁より降りてその行く手に立塞がる。）
え、わからぬ奴だ。命が惜しくないならばなぜこの寺に隠まつてくれと頼んだのだ。今となつては貴様の命でも貴様の自由にはならぬと思へ。虚無僧寺にかくまつた者を世間の奴等に討たせては、普化宗一統の恥辱になる。第一にこの控へ番所をあつかつてゐる俺の

役目が立たぬ。あんな奴等が幾人押掛けて来ても、おれが屹と追返してやる。安心して引込んでゐろ。

半彌。

いや、引込んでゐられぬ。今まではおれがみんな間違つてゐたのだ。

（突き退けて門をあけるを、空月はひき戻す。）

空月。

え、氣ちがひめ。それほど死にたくば斯うしてやる。

（空月は尺八にて半彌の眞向を打つ。半彌は倒れて息絶す。お辻はおどろいて駆けよる。）

お辻。

あれ、兄さまは……。もし、兄様……。兄様……。

空月。

（笑ふ。）今度こそはほんたうにぶち殺してしまつた。この尺八で眞向を打たれたら、いくら騒いでももう生きることではないのだ。

（お辻は兄の死骸に縋りて泣き伏す。）

愛泉。

それだから云はないことか。馬鹿な奴だな。餘計な騒ぎを仕出來して、折角の酒が醒めてしまつた。

（下の方より十三郎は引返して出で、門の外にてうかゞふ。）

草谷。

して、この死骸はどうするな。

虚無僧

空月。

刃物で斬つたり突いたりしたら格別、不行儀の弟子を尺八で折檻したらば脆くも死んでしまつたのだ。その通り届けて出ればいゝ。死骸は裏の竹藪へ埋めておけ。

友徳。

死骸を片付けらのも勇士の仕事だ。

愛泉。

さうだ、さうだ。貴様も手傳へ。

十三郎。

(友徳と草谷は半彌の死骸をかき上げようとする。十三郎は外より聲をかける。)

空月。

かさねてお願い申す。その死骸はなにとぞ拙者におわたし下さるまいか。

十三郎。

(みかへる。また来たか。(門をしめる。))それ、早く投げ込んでしまへ。

十三郎。

(かさねて呼ぶ。))もし、お願いでござる、お願いでござる。

(内ではそれに頓着せず、愛泉は先に立ち、友徳と草谷は半彌の死骸を上の方へ運び去る。お辻も泣くく附いてゆく。十三郎は外より見送る。)

空月。

は、飛んだ殺生をした。せめて手向けに一曲吹いてやらうか。

(空月は奥に入る。下のかたより神崎と塚田も出づ。十三郎は残念さうに二人と顔を見あはせる。奥にて尺八の聲きこゆ。)

幕

承久繪卷

明治四十二年十二月作。

明治四十三年一月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——中納言光親、油坊主（市川高麗藏、後の松本幸四郎）
伊賀判官光季（市川左團次）壽王冠者（市川壽美藏）佐々木高重（市川小團次）
琵琶法師了（市川左升）早月前（澤村源之助）卯の花（市川莚若、後の松蔦）
秋野（市川莚女）小夏（澤村宗之助）など。

登場人物——中納言藤原光親。伊賀判官光季。壽王冠者光綱。伊賀次郎丸。佐々木左衛門尉高重。權中納言有雅。少納言忠信。左中辨範輔。中務少輔師安。御所の使押松丸。伊賀の臣上野七郎。佐々木の臣唐崎左源一。北條の臣笹目大六。琵琶法師了。油坊主。光親の室早月の前。光親の侍女小夏、小鈴。佐々木のむすめ卯の花。卯の花の乳母秋野。ほかに武士、公家、仕丁、群集など。

第一幕

承久三年四月十五日、京都下加茂神社の葵祭。平舞臺にて、上のかたに大華表あり、傍に「下乗」の高札を樹つ。境内、境外ともに大樹おひ茂りて、社殿は若葉がくれに遠くみゆ。
（見物の群集、華表の前に混雑す。）

見物甲。お勅使の行列ももう疾うに見えたほどに、やがて樂も始まるであらうぞ。

見物乙。遅うならぬうちに見物にまゐらうではないか。

見物丙。あゝ、これ、これ、無闇にあとから押してはならぬ。静にさつしやれ。

(群集はわやく云ひながら華表のうちに入る。光親卿の侍女小夏、十七歳、被衣をかぶりて出づ。華表の中より伊賀の嫡子壽王冠者光綱、十七歳、腹巻の上に白の水干をつけて出づ。)

小夏。壽王どの。

壽王。おゝ、小夏殿か。

小夏。けふはお前様も警固のお役目、御苦勞に存じます。

壽王。お身も神事を拜見にまゐられたか。とかくに陰るは若葉時の習ぢやが、けふは朝より晴れ

小夏。渡つて、われ人ともに幸ひと申すもの。これも神の御威徳であらうぞ。

壽王。神の御威徳がそれほど顯著なものでござりませうか。

小夏。云んでもないこと。神をうたがふは凡夫の惑ひぢや。

壽王。いえ、わたくしは疑ひます。命をかけた大事のねがひも、神はかなへては下さりませぬ。

小夏。なう、壽王どの。それでも神は尊いと申されませうか。

壽王。尊いと思へばこそ、お身も拜みにまゐられたのであらうが……。

小夏。わたくしが拜みにまゐりましたは、神でも祭でもござりませぬ。

(小夏指り寄る。壽王すこしく迷惑の體なり。佐々木の娘卯の花、十六歳、被衣をかぶり、乳母秋野、四十歳前後、笠を持ちて出で、木蔭にうかゞひゐたりしが、この時つか／＼と進み出づ。)

秋野。おゝ、壽王どのがこれに見えます。さあ、お傍へお出でなされませ。

秋野。(秋野は卯の花の手をとる。卯の花、恥かしげに躊躇す。)

秋野。はて、なんの御遠慮がござりませう。壽王どのとお前さまとは、親が許した許嫁ぢや。天下晴れての女夫仲ではござりませぬか。

(小夏へきこえよがしに云ひ、無理に卯の花の手を取りて、壽王のそばへ突き遣る。卯の花は猶恥らふ。)

秋野。(聞かしげに。お前様がそのやうに内端にしてお出で遊ばすと、世のなかは油断のならぬも

ので、どのやうな間違ひが起らぬともかぎりませぬ。美しい殿御は熟した木實も同様、早うわが手に掴み取つてしまはぬと、憎い鴉めの餌食となりませうぞ。ほんに鴉は憎いものぢや。(小夏を睨む。)

小夏。(あざ笑ふ。)天の恵みで熟した木實をわれひとりの物と思ふは人間の淺薄ぢや。鷹とて鴉とて取らいで置かうか。

秋野。お、鳥をふせぐには案山子がある。ましてこの乳母といふ案山子は生きてゐるぞよ。盗みする鴉など寄せ附けうか。

卯の花。あゝ、これ、乳母。こゝで争ひはせぬものぢや。

秋野。ぢやと云うて、あまりに憎い奴……。

卯の花。憎いと云うて、ほかに聞いてゐるお人もある。(壽王の方を見かへる。)あまりに端下ないこと云やると、おさけすみも恥かしい。ちと嗜んだがよからうぞや。

(秋野は澁々ながら口を嚙む。壽王はそれをよき機と、俄に思ひ出したことくに我來し方をみかへる。)

壽王。

下加茂の神事相濟めば、勅使は更に上加茂へ御參拜相成る筈。それがしはそのお先觸にまゐる途中ぢや。時刻移ればこれにて御免……。

卯の花。では、これから上加茂へ……。

壽王。お前様方はゆる／＼御參詣なされい。

秋野。

(云ひすて、向うに去る。皆々あとを見送る。奥にて樂——東遊び——の聲きこゆ。)

お、樂がもう始まるさうな。さあ、ちつとも早うお越しなされませ。

(卯の花、秋野は打連れて華表のうちにゐる。小夏は嫉ましげに見送る。華表のうちに『喧嘩ぢや、喧嘩ぢや』と喚く聲。小夏は避けて急ぎ去る。社内さわがしく、見物の男女大勢走り出づ。)

甲の男。喧嘩ぢや、喧嘩ぢや。

乙の男。相手は仕丁と武士ぢや。

丙の娘。おほかた神酒に酔うてのいさかひであらう。

甲の男。あれ、あれ、武士が太刀をぬいたわ。

乙の男。やれ、あぶない。逃げる、逃げる。

(つゞいて華表のうちより群集なだれ出で、わやく云ひながら四方に逃げ去る。華表のうちより籠手應當につけたる武人數人と仕丁數人、いづれも酒に酔ひたる體にて、あるひは胸倉をつかみ、あるひは頭髪を取りなどしつ、挑み争ひながら狂ひ出づ。あるひは太刀をぬきて當途もなしに振り閃かすもあり。たがひに起きつ轉びつ争ふところへ、華表のうちより伊賀判官光季、四十餘歳、直垂、腹巻にて長巻を挿込みて出づ。)

光季。

やあ、さわがしや、者共。けふは如何なる日、こゝは如何なるところと存するぞ。日本中にきこえたる葵祭の當日に、酔酩の喧嘩三昧、恐れ多しとも思はぬか。鎮まれ、鎮まれ。

(皆々、これにてやうやく鎮まる。)

光季。

勅使の参拜相濟むまでは、かならず神酒を口にすなと、かたく申付けて置いたるに、その戒めをやぶると云ひ、あまつさへかゝる曲事を仕出すとは、言語道斷……憎い奴め。仕丁舎人は公家の成敗、さむらひは武家の成敗、それにある光季の家來どもは、一人も残らず勘當ぢやぞ。

(主人の怒はげしきに、家來どもは酒の酔も醒め果て、唯恐れ入るのほか無し。この時、華表のうちより佐々木左衛門尉高重、四十餘歳、直垂、籠手、腰當にて白羽の矢を背負ひ、弓を持ち出て出づ。) 判官どの、先づお待ちやれ。御立腹はさることながら、武士の争鬪はまゝある例に、まして今日は尊き神事の折柄ぢや。何事も御勘辨ねがはしう存する。こりや伊賀の衆。

家來。

はあ。

高重。

この場はそれがして扱うて取らすほどに、以後を屹と慎むがよからう。もはや勅使下向に間もあるまい。お身たちは河原に列を正して、警固の用意を怠るまいぞ。仕丁舎人もみな

立ちませい。

家來。

はあ。

(家來どもは始めて蘇生の思ひをなし、仕丁等と共に早々に立ち去る。華表の中より卯の花、秋野に唐崎左源二附き添ひて出づ。)

卯の花。

父上、怖いことござりました。

秋野。

舞樂を拜見にまるる途中、なにかは知らぬが今の喧嘩で、ほんに胸を冷しました。

左源二。

併しどなたにもお怪我は無く、先づおめでたう存じます。

高重。

(打笑む。)は、左のみ騒ぐほどのこともない。喧嘩は鎮まつた。安心せい。

光季。

娘御達に怪我こそなけれ。數萬人の群集の中には、不時のわざはひに遭うた者がないともかぎらぬ。今日の警固をうけたまはりしは、左衛門どのと光季との兩人ぢやに、騒動を演出したるはそれがしの家來ばかり、相役のお手前に對して面目もござらぬ。

高重。

さりとは又あらたまつたる御挨拶、これが餘人ともあらばこそ、お手前の子息壽王冠者とそれがしの娘卯の花とは、已に許嫁の約束あつて、いはゞ一門縁者の間柄ではござらぬか。他人行儀は措かれい、おかれい。

光季。

(ひとり言のやうに。)一門縁者として、義によつては敵ともなる世の中ぢや。

高重。

(聞き咎める。)なに、敵ぢやと……。む、さては判官どの。この佐々木は近江の一族、當時は京家の武士たるによつて、鎌倉方のお手前達と、何時敵味方とならぬともかぎりぬと云はるゝのか。それはお手前にも似合はぬ邪推ぢやよ。なう、左源二。

左源二。

はあ、御一門も同様の伊賀どのに對して、殿にも御如才がござりませうか。敵味方などは夢にも存せぬことござります。は、ムムム。

光季。

いや、これは光季のあやまちぢや。由なきことを口走つて、方々にも要らぬ心配をかけ申したわ。かならずお氣に支へてくださいな。

高重。

勿論のことぢや。お手前も子息が可愛からうが、それがしも一人の娘が可愛い。その娘の戀婚や舅御に對して、なんで二心がござらうぞ。いや、それは又ゆるくと物語る時もあるらう。やがて勅使も下向の時刻、それがしは一足お先へまゐるぞ。

光季。

それがしもおあとより参るでござらう。

秋野。

(高重は會釋して華表のうちに入る。)勅使下向とあるからは、こゝに佇立んでもゐられますまい。

左源二。

行列を拜むには、河原が一番宜しうござります。

卯の花。

では、判官様、御免くださりませ。

光季。

(三人は會釋して去る。)

光季。

(ひとり言。)佐々木の狸おやぢめが、相も變らず口先で、この光季を罵さうとし居るわ。

大六。

(北條の家來笹目大六、忍びすがたの旅装束にて出づ。)

大六。

お、伊賀殿ではござりませぬか。

光季。

めづらしや、笹目大六。なんととして京へ上つたぞ。

大六。

(大六はあたりを窺ひて進みよる。)

大六。

京にはさきごろより鎌倉征伐のおん企ある趣、細作の者より度々の注進によりて北條

大六。

どの已に委しく御存じでござります。しかるに京都守護職たるお手前よりは、なんの便り

大六。

もなきは不思議、よくく實否を取り糺して、早々に臨機の御處置あるやう催促いたせと

大六。

のお使にござります。

光季。

鎌倉より遠路の使、大儀であつた。但し右の一條については、光季いさゝか存する旨もあ

光季。

れば、たゞこのまゝにお捨置き下されいと、其方立歸つて申上げい。

大六。

光季。

大六。

光季。

大六。

光季。

大六。

壽王。

光季。

有雅。

お詞ではござれども、唯このまゝに捨置かれましては……。すでに鎌倉營中に於かれましても、お手前の京都に對する仕向方が、ちと手鈍いかといふ噂もござりますが……。手ぬるいも手強いも、それがしの胸にある。鎌倉の爲、又天下のために、悪かれと思ふ光季でないことは、北條どのも豫て御存じの筈ぢや。

でも、今のうちに手を着けませいで……。くどい奴。兎かう申さず、早う歸れ。

はあ。

(大六は澁々ながら會釋して去る。光季はあとを見送りてちつと思案す。壽王冠者、走り出づ。)

父上、上加茂の御社でも、勅使お迎ひの支度と、のひました。

おゝ、よい、よい。では、河原に控へたる家來共を呼びあつめて、警固の用意をせねばなるまい。壽王、まるれ。

(兩人行きかゝる。華表のうちより權中納言有雅、左中辨範輔、中務少輔師安の三人出づ。いづれも冠に葵の葉をかけたリ。)

光季、お待ちやれ。

光季。

有雅。

光季。

範輔。

師安。

有雅。

範輔。

師安。

有雅。

範輔。

師安。

有雅。

範輔。

はあ。(兩人立戻りてひざまづく)

餘の儀でもないがなう。先刻神事の最中に社頭俄にさわがしく、老弱男女が救ひをよぶ聲

聲、耳をつらぬいてきこえたが、ありや何ぢやな。

お耳にきこえて恐れ入りました。警固の武士どもが神酒に酔ひ狂うて、社頭をさわがしま

したるは、それがしが重々の不取締、つゝしんでお詫を申上げます。

ほう、それは希代の椿事ぢや。狼藉をいましむる筈の武士が却つて狼藉を働くとは、檢非

違使の役人どもが放火盜賊を働くやうなものぢやな。

そも今日のおん祭に、お身達を召されたはなんの爲ぢや。それを思うたら片時も油断はな

るまいに、諸事なほざりに心得て居ればこそ、かやうな過ちも自然出來するのであらう。

それと申すも、つまりは京家の御威光を輕んずるからのことぢや。日頃から心掛けのよう

ない鎌倉の武士共、或はことさらに狼藉を仕出して、神事の妨げなどせうと巧んだのかも

知れぬぞ。

おゝ、それほどのことは仕兼ねぬ和郎達ぢや。いや、まだ此上にもどのやうな事を仕出さ

うも知れまい。おゝ、怖や、怖や。

承久繪巻

師安。

ほんにさうぢや。わし等は膽が細いによつて、お身達のやうな虎狼より怖ろしいものを供には連れられぬ。もうこれで歸りや、歸りや。

光季。

下加茂の神事は相果てましたれど、勅使はこれより上加茂へ御参向、我々もおん供申さねばなりません。

有雅。

いや、いや、警固のさむらひは佐々木一人。

壽王。

では、我々のおん供は……。

範輔。

ならぬ。

師安。

かなひませぬ。

(光季父子は顔みあはせて當惑す。華表のうちより中納言光親、三十八歳、勅使にて衣冠束帯、つづいて中納言忠信、二十九歳、打ち連れて出づ。)

光親。

警固のさむらひ共が酔ひ狂うて、神事の庭をざわがしたるは、その罪淺からずとは申しながら、狼藉は武家の家來ばかりでなく、仕丁舍人共も立ちまじりしと聞くからは、公家にも不取締の咎はある。云は、喧嘩兩成敗、あながち光季のみを叱られまい。勅使のお詞ぢや、ありがたく御禮申して、相變らずお供に立ちませうぞ。

忠信。

光季。

はあ。ありがたう存じます。

光親。

用意よろしくばすぐに下向……。

(忠信は社の方をみかへりて呼ぶ。)

忠信。

勅使下向。

(社内の若葉のかげより舍人は鞍鞍置きたる馬をひきて出づ。つづいて唐櫃を荷ひしもの、飾り花の傘をかつきし者、牛車をひきたる者など大勢出づ。光親は馬に乗る。仕丁は花傘をさしかけてゆく。有雅、忠信、範輔、師安、その他の公家、仕丁、舍人、童等、列を正して肅々として進む。すこしく引き下りて、光季と壽王行く。高重は武士大勢を引具して出で來り、おなじくそのあとを打つてゆく。樂の聲きこゆ。)

幕

第二幕

(一)

藤原光親の屋敷。二重屋體にて、床には鏡を入れたる唐櫃、箱附きの長巻などあり。庭には葉櫻、垣のあたりには卯の花開きみだれたり。五月十五日のゆふ刻。

(侍の一人は箒を持ち、一人は水を打つてゐる。)

侍 甲。先月の葵祭り以來、よい鹽梅に天氣かついたと思ふたが、けふは空模様可怪くなつたなう。

侍 乙。なにを云ふにも今はさみだれの時節ぢや、些とは降らねばなるまいよ。

侍 甲。降ると知りつゝお庭掃除も、なんだか氣が進まぬ仕事ぢやが、殿様も奥様もお綺麗好きぢや。

侍 乙。御機嫌を損ぜぬやうに、早う掃除してしまはうか。

(二人は庭を掃いてゐる。奥より光親の室早月の前、三十歳前後、小袿、緋の袴。侍女小鈴、十七八歳、小袖、切袴にて出づ。)

早月。おゝ、掃除は綺麗に出来ましたの。

侍 甲。はあ。一通りは相済みました。

早月。掃除はもう其位でよからうぞ。やがて日も暮るゝであらう程に、そち達も部屋へ退つて休息しや。

侍 甲。では、御免くださりませ。

早月。あ、これ、これ、わたしはこゝにゐる程に、小夏にまゐれと申し傳へてくりや。

侍 乙。かしこまりました。

(侍二人は一禮して去る。早月は眉をひそめ、胸をおさへて俯向く。)

小鈴。御臺様、また御氣分がお悪うござりますか。

早月。いや、胸苦しいはわたしの持病ぢや。とかくに氣が苛々して、頭が痛む、胸が支へる。困つたものぢやなう。(さびしく打笑む。)

小鈴。御持病とは申しながら、唯今は時候の移り變りで、いづかたにも病人が多いとか聞きます。おからだを御大切に遊ばしませ。殊にこのごろは殿様も……。

早月。それが第一に病の源ぢや。そちも知る通り、先月葵祭の翌日、御所で御評議のあつた砌、殿には御諫言を申上げたとやらで、上の御意にさからひ、公家衆には疎まれて、その日より塾居仰せつけられた。わが口でわが夫を褒むるではなけれど、智慧といひ器量と

云ひ、御所の内では肩をならぶる者もなき中納言どの。それを遠ざけらるゝやうでは、恐れながら京は闇やみぢや。なう、小鈴。

左様でござります。中納言殿はあつばれの御器量人ぢやと、都の中では下々まで、お褒め申さぬものはござりませぬ。

(奥より小夏、小袖、切袴にて出づ。)

召しましたか。

小夏。

おゝ、小夏、あらたまつて用事と云うではなけれど、あまりに氣が鬱してどうもならぬ。

庭の若葉を題にして、そち達と歌合せでも爲ようと思つたのぢや。

小夏。

それは面白うござりませう。併しわたくしも此頃は、なにやら氣分がすぐれませず、三十

一文字はどう連ねまするのやら、忘れてしまつた程でござります。

小夏。

そちも氣分がすぐれぬとは、どのやうな病ぢやの。

小夏。

いえ、別に病と申すでもござりませぬが……。

小鈴。

小夏どのが病の源は……。

(云ひかくるを小夏は眼で制す。小夏はうなづく。)

小夏。

いや、隠すまい。わたしも薄々は聞いてゐる。それならば猶のこと、面白い歌でも出来さうなもの。貧の盗みに戀の歌とやら、世のことわざにも云ふではないか。

(小夏うつむく。小夏は一膝進める。)

小夏。

折柄あたりに人も無し、憚りなく云うて聞かすが、彼の壽王冠者のことは思ひ切つたがよからうぞ。

小夏。

え。

小夏。

伊賀判官光季は北條の縁者、且は腹心の家來、京都守護職といふは表向きの名で、まこと鎌倉の隠し目付ぢや。今の世のありさまでは、遠からず京と鎌倉とが軍を開くは必定で、先づ目ざさるゝは伊賀の父子、第一に彼等から退治せねばなるまい。そちがいかほど慕つても、壽王は我々がかたきの子ぢやぞ。

小夏。

でも、殿様は軍には御不同意で、御諫言を申上げられたではござりませぬか。

小夏。

いや、その御諫言には、わたしが不同意ぢや。あれほどの御器量を有ちながら、とかくに引込み思案のみせらるゝが、わたしは齒痒うてならぬのぢや。かやうな時には眞先に押進んで、關東の武士どもを撃ちほろほし、日本を再び公家の天下として、大臣にも關白にも

昇らるゝが、男の本意ではあるまいか。

小夏。お詞ではござりますが、殿様が常々仰せられまするには、今日の所、京鎌倉とせり合つても、とても勝つべき見込みはない。日本中の人数をあつめても、武藏相模の武士にはかなはぬ。それを知らずに輕はずみのことなどしたら、いよく京都の御威光を墜とす基ぢやと……。

早月。いや、それが心得違ひぢや。關東の武士がいかほど強うても、かれらは朝敵ぢや。遠くは

惠美押勝、近くは相馬將門、およそ朝敵と呼べるゝものに、榮えた例があらうか。

小夏。それも殿様が仰せられました。惠美押勝や相馬將門は、われから謀叛して朝敵となつたが、鎌倉には未だ謀叛の兆もない。それを此方から朝敵と名をつけて無理に討手など下されては……。

早月。(いよく急いで。)たとひ謀叛は爲ても爲いでも、上を覆ろにする奴はすなはち朝敵ぢや。

北條一門が跋扈して、京家のある甲斐無しに仕向くればこそ、我々までも世をせばめられ、位倒れの瘦公家と人に後指さるゝが、なんほう無念ではあるまいか。そちも公家に奉公する身で、共々に口惜しいとは思はぬか。

小夏。それぢやと申して、勝ちさうもない軍などなされたら、猶々御無念を重ねる道理ではござりませぬか。

早月。えゝ、勝ちさうもないとは誰が決めた。

小夏。殿様が仰せられました。

早月。その殿が迷うてござるのぢや。

(早月は嵩にかゝりて猶も云はんとする時、奥より中納言光親、小袖、指貫にて出づ。)

光親。さて、開しいことぢや。女子どもが無用の詞争ひ、もうよい程にいたさぬか。小鈴もここに居りながら、なぜ仲裁をせぬのぢや。

小鈴。わたくしも先刻からはらくいたして居りましたが、御臺様の御氣色があまり烈しう見えまするで、つい差控へまして……。

光親。癪癖の強いはかれの癖ぢや。困つたものなう。はゝゝゝ。

(光親は悠然として座に着く。早月は怒なほ鎮まらず、小夏を憎さげに見かへる。)

早月。二口目には鎌倉方を最良して、主のことばに逆らうは、壽王冠者といふ小悻のためであらう。戀にこゝろも眼も眩んで、かたきに情を通はす奴、見るも汚れぢや。早う起ちや。

小 鈴。

御臺様へはわたしからお詫せうほどに、おまへはお部屋へ退りなさんせ。

小 夏。

お主に詞を返したはわたしのあやまり、どうぞお詫を頼みます。しかしお主の御威光でも人のこゝろは枉げられぬものぢや。たとひどのやうなお叱りを受けうとも……。

小 鈴。

そのやうな事はこゝで云はぬものぢや。さあ、一緒にござんせ。

(小鈴は無理に小夏をひき連れて奥に入る。)

皐 月。

かへすくも憎い奴め。

光 親。

あの少女は戀に狂うて居るのぢや。われ人共に一途におもひ詰むると、物狂はしうなるものぢや。狂へば前後をわすれて、途方もないことを仕出す。京の公家衆も皆それぢや。

皐 月。

京の公家衆は狂うて居りまするか。

光 親。

狂はいで鎌倉退治など思ひ立たれうか。捨置いては天下の大事ぢや。

皐 月。

お前様はどうあつても、御不同意でござりまするな。

光 親。

狂人走つて不狂人俱に走るは、おろかの至りではないか。

(光親は取合はず。皐月は不服の體にて口をつぐむ。奥より小鈴出づ。)

小 鈴。

少納言どの見えられました。

光 親。

おゝ、少納言か。これへと申せ。

小 鈴。

はあ。(引返して去る。)

光 親。

少納言どの見えたとあれば、又どのやうな内談が無いともかぎらぬ。お身は暫時遠慮せい。

皐 月。

はい。

光 親。

お身がこゝに居ると餘計な口など出してならぬ。天下の大事は女童のかゝはるべきでない。行け、ゆけ。

(皐月は澁々起つて奥に入る。引き違へて少納言忠信、烏帽子、狩衣にて出づ。)

光 親。

ようぞ見えられた。これへ、これへ。

忠 信。

御免ください。座に着く。この長の日垂れ籠めてのみおはしては、さぞ御氣鬱でござらうな。

光 親。

お察しください。先月以來贅居を仰せ付けられ、かやうに引籠りて日を暮せば、御所の模様も知るに由なく、たゞ心のみ痛めて居りますが、その後の成行はどうでござらぬな。

忠 信。

お身が贅居仰せつけられた後は、一人も遮つて止むるものなく、御所の内は明けても暮れ

光親。

ても軍評定、すでに五日の早朝に、押松丸を使として鎌倉へ下された。む、關東の人数をあつむる爲ぢやな。中國西國はいざ知らず、關八州の武士どもは、いづれも北條が恩顧の者ばかりで、おそらく一人もお味方にはまるまい。うかくお使など下されて、萬一敵の手に捕はれたら、大事露顯は眼のあたりぢやに、さりとは淺薄な……。

忠信。

それは我等からも申上げたれど、なにを申すも多勢に無勢で、たちまちに評議一決、今更致方もござりませぬ。兎にも角にもいよく大事と相成りましたなう。

光親。

天下の權を朝廷のおん手に收めらるゝといふ御趣意は、あながちに今に始まつたことではない。後白河の御代には、頼朝の力をかりて平家を倒し、頼朝が榮ふるに及んでは、更に義經に鎌倉追討の院宣をくだされた。かやうにして漸次に強きものを挫き、朝廷の御威勢を昔にかへさんと思召すが、歴代の御趣意ぢや。されども時いまだ到らず、事は常にこゝろざしと違つて、武士の勢はいよく強く、今となつては殆ど手を下すべきやうもない。右様……おもへば残念至極ぢやが、時の勢は人の力の及ぶところでない。こゝ暫らくは堪へ忍んで、おもむろに時節を待つが肝要ぢやと、口ごろ口を酸くして申し聞かすに、前後を

忠信。

かへりみぬ血氣の公家儂、たゞ一途に燥り立つて、遂にかやうの大事をひき起すとは、近ごろ心外千萬ぢや。

光親。

仰せ一々御道理、我々もそれを思はぬではなけれど、今この際に唯ひとり逡巡するも、なにとやらん卑怯のやうにも相見えするで、心ならずも同意いたした。は、なにが卑怯……。さりとはお身にも似合はぬ。血氣に逸るのみが勇者でない。これ見られい。

光親。

(光親は起つて唐櫃より緋緘の腹巻を取り出し、更に長巻を把る。)
われ等は武士でないが、君のおん大事とあらんときは、装束ぬいで鎧を着け、歌膝くむ足に脛當をはいて、この長巻にかたきの血を染むほどの覺悟はある。但しそれは最後のことで、なるべくは事穩便に取り繕ひ、おのづから敵の倒るゝを待つといふ工夫が大事ぢや。と申しても、今は遅い。あゝ、これも是非なき御運の末か。遠からず洛中も修羅の蒼となるであらうぞ。

忠信。

いや、それも早や眼の前に迫つて居りまするぞ。とは又、なぜな。

光親。

承久繪卷

忠信。

實は今日、伊賀判官より使者を差越し、すこしくお尋ね申上げたき儀がござれば、公家衆御一人今宵のうちに手前屋敷までお越し下されとのこととござつた。

光親。

さては光季が早くも知つたか。お、さもあらう。かれも己が身に火の着くを、知らぬほどの迂濶の男でもあるまいよ。

忠信。

されば御所にも俄に評議をひらき、これは大事の漏れたるに極まつたり。この上は一刻も猶豫はなるまじ、先んずれば人を制するの例、お使など遣はさるゝまでもなく、今宵のうちを寄せかけて、先づ彼めより攻めほろほせと云ふもあり、あるひは兎も角もお使をくだされて、敵の模様を探るべしとも云ひ、いづれとも未だ決着しませぬ。實は其事おしらせにまるつたのぢや。

光親。

それなれば、なぜ早う云はれぬぞ。この上は誰彼と申さうより、光親お使をうけたまはつて、伊賀の屋敷へゆき向ひ、かれ如何なる難問を云ひ出づるとも、我もまた臨機應變、辯にまかせて説きやぶり、一時の急を救ふであらう。

忠信。

さりとして蟄居のお身の上では……いや、それ等のことなど憚るべき場合でない。推してこれより参内し、諸卿とも評議の上

光親。

伊賀の屋敷へ向うであらう。

忠信。

して、萬一申し開きの相立たざる時は……。

光親。

申開き相立たざるに於ては、この光親を無事には歸すまい。その時に始めて討手を向けらるゝも遅くはあるまい。光親の安否判断するまでは、軽々しき振舞かたく無用と、お身よりも一同に申聞けられい。

忠信。

心得申した。さらばこれより御一緒に……。

光親。

参内いたすでござらう。誰そあらぬか。

光親。

装束を着くるぞ。用意いたせ。

小鈴。

はあ。

(奥より小鈴出づ。)
(光親と忠信は奥に入る。小鈴は腹巻を唐櫃に收め、長巻を立てかけて、これも奥に入る。庭の木立のあひだより笹目大六、白き女の衣をかつぎて窺ひ出で、奥へ忍び入らんとす。奥より早月の前出づ。)

早月。

何者ぢや。

承久繪巻

（大六に答へず、刀をぬきて斬りつければ、皁月は身をかはして、床に立てたる長巻を把り、兩人渡り合ふ。小夏は庭づたひに走り出で、かくと見るより身縋ひして、大六を組み止めんとす。大六ふり拂つて奥へ進まんとするところを、皁月は長巻の石突にてその脇腹を突く。大六堪らず、縁より轉げ落つるを、小夏は寄合うて取つておさへ、かれが太刀の緒を解きて縛む。）

皁月。 さあ、おのれ、一寸も動いてみよ。容赦はせぬぞ。

小夏。 なんとしてこれへは参つたぞ。それ真直に云ふまいか。

大六。 （面をあげる。）われ等も武士ぢや。卑怯につゝみ隠すまい。中納言どのを討たうが偽よ。

皁月。 おゝ、さもあらう。して、伊賀光季にたのまれたか。

大六。 むゝ、伊賀殿に頼まれた。

皁月。 光季が中納言どのを殺せと云ふたか。

大六。 京都において鎌倉征伐の企てであることは、伊賀殿にも萬々承知、このまゝに捨置いては、いかなる大事に及ばうも知れぬ。さりとてあちらから手出しのない中に、われから討手を差向くるも流石に憚りあり。なんとかして一日も早う事を起させ、嫩葉のうちに刈取る工夫が肝要ぞと、先頃から密々に評議の末に、我等を鎌倉から召寄せられたのぢや。

小夏。 して、殿様を殺さうとは……。

大六。 光親卿はきこゆる分別者、この仁が世にあるあひだは、京でも容易に事を起すまい。先づかれを亡きものにすれば、あとは無分別の青公家ばかり、いづれも前後をかへりみず、すぐに旗あげと決定して、こつちの思ふ壺に嵌まるといふものぢや。さればこそ姿を變へて當地へ入り込み、卿の出入りを附狙うたが、先月以後蟄居とやらで外出も無い。この上は忍び入つて一撃ちと、今宵うかゞひ寄つたるに、運拙うして女子どもに生擒られたは、われ等一生の不覺、たゞく口惜い。

皁月。 聞けば聞くほど、憎い、怖ろしい、光季めの悪巧み……。なう、小夏。これでも鎌倉征伐というたが無理か。

小夏。 さあ。（さしうつむく。）

（奥より光親は冠、袍、指貫にて、忠信と共に出づ。）

光親。 曲者を搦め止つたはあつばれ手柄ぢや。この光親を討ち取つて、いくさの機を早めうとは流石は北條、よう巧んだなう。

忠信。 して、これは光季の細作でござらうか。

光親。いや、光季はおそらく知るまい。

大六。え。

光親。は、わが前でいつはるな。光季は北條の縁者ながら、京鎌倉の無事をねがうて居る者ぢや。さればこそ北條も悶かしう思うて、ひそかに光季を出し抜き、かやうな小刀細工を案じたのであらうよ。

忠信。なにさま光季は武士氣質一遍の男、暗撃ちなどいふ卑怯の企てには同意いたすまい。して、この曲者の御處置は……。

阜月。わしに思ふ旨もあれば、しばらく其儘に繋ぎおけ。又この事はいつかたへも沙汰するな。

光親。さなきだに人々の氣が立つてる最中に、このやうな事がきこえ渡らば、いよく騒動の口火とならうぞ。

(空にてほととぎすの聲きこゆ。)

忠信。お、ほととぎすか。

光親。ほととぎす名をも雲井に揚ぐるかな、弓張月のいるに任せて……とは基實の卿と頼政との名高い歌ぢやが、その頼政も由ない軍をおこして、平家征伐の本意も得達せず、宇治平等

院にて敢なくほろびた。殷鑑遠からず……。(嘆息して。) いざ、まるらう。

(時鳥つゞけて鳴く。)

(11)

祇園八坂神社の前。正面より奥へかけて兩側に石燈籠連り立つ。左右には松杉の大樹しげり合ひたり。おなじ夜。

(伊賀の郎等上野七郎景房、烏帽子、直垂、籠手、腰當にて、家來二人に松明を持たせて上のかたより出づ。琵琶法師了、盲人にて琵琶と杖とを持ち出て出づ。)

七郎。了一どのか。

了一。(耳をかたむける。)お、七郎どのぢやな。今夜も又お見廻りでござるか。

七郎。當春以來、洛中兎角にさわがしく、放火盜賊など徘徊するのみか、猶別におだやかならぬ風聞もあれば、かやうに油断なく見廻つて居るのぢや。

了一。それは御苦勞でござるな。わしはこれからお屋形へ若様のお稽古にまかり出る處、こゝで

七郎。

逢うたは丁度幸ひぢや。さあ、御一緒にまゐらうかの、
いや、折角ぢやが、手前は清水から七條のあたりを見廻らねば役目が濟まぬ。今宵はどう
やら雨催ひぢや。降らぬうちに早うまゐられい。若様もさぞお待兼ねであらうぞ。

家來甲。

しかし今宵は御所よりお使が見えらるゝ筈。
そのお取込みの折柄に、琵琶のお稽古はどうであらうな。

了一。

いや、いや、お稽古はあつても無うても、面白さうなお話でもして、若様のお伽をするが
わしの役ぢや。若様も亦、わしのまゐるを待つてござるに相違ない。どれ、早う伺ひませ
うか。では、七郎どの。

七郎。

氣を注けてゆかれい。
(あたりの木葉をさわがす風の音烈しく、了一はふき倒されんとして踏みとゞまる。)

了一。

おゝ、えらい風が吹き出したぞ。わしは眼が不自由ぢやでよくも分らぬが、けふは朝から
日の色が陰つて、なんだか忌な日ぢやさうな。(耳をかたむける。)

おゝ、吹くわ、吹くわ。
風の音とは知りながらも、あのざはくといふ聲が……馬の蹄の音……鎧の袖の摺れ合ふ
音……関の聲のやうに聞えてならぬ。こりや何か大いくさでも始まる前兆ではあるまいか

な。

七郎。

なんぢやと……。
いや、いや、そのやうな氣振りが些とでも見えたなら、わし等のやうな旨よりも、眼明き

了一。

のお身達が眞先に騒ぎ出す筈ぢや。それまでは先づ安心か。はゝゝゝゝ。
(了一は杖をつきて探り足にあゆみ去る。七郎等も下の方に去る。風はひとしきり止む。佐々木左

衛門尉高重、娘卯の花、乳母秋野、家來一人に松明を持たせて出づ。)

高重。

路は暗い。樹根につまづいて怪我すまいぞ。
乳母と毎夜この御社へ通ひますれば、路の勝手もよう心得て居ります。

秋野。

常は女のふたり連れでさへ、馴れては寂しいとも思ひませぬに、まして今宵は殿様も御一
緒でござりますれば、心強う存じます。

高重。

過ぎし二月のはじめより乳母同道にて夜ごとの神詣は、仔細があらうと察しながら、推し
て詮議もいたさぬは、子に甘い親の習ひぢや。神を頼むよりも親をたのめ。無理な願ひも
肯いて取らせうに、はゝゝゝゝ、今宵はわしも處用あつて神職のもとまで赴けば、そち達
も參詣を濟まして、あとより尋ねてまゐれ。連れ立つて戻らうぞ。

卯の花。わたくしばかりではござりませぬ。父上もこの頃は折々この御社へまゐられますが、どの

やうな御用でござりますな。

高重。わしの用向か。いや、それは云ふまい。そちが願ひの筋をいはぬと同じことぢや。

卯の花。わたくしが願ひの筋を申上げましたら、おまへも打明けて下さりますか。

秋野。あ、もし、お前様。百日の満願が果つるまでは、心願を他人には明すまいと、お誓ひなさ

れたではござりませぬか。

高重。いや、云はいても大かたは察して居る。

卯の花。わたくしも大方は察して居ります。

高重。む。では、わしの用向といふを當てゝみい。

卯の花。先づおまへから當て、御覽じませ。

高重。そちは戀ぢや。

卯の花。お前は呪詛ぢや。

高重。壽王冠者と添ひ遂けうといふ……。

卯の花。鎌倉を攻めほろほさうと云ふ……。

高重。これ、聲高に申すな。

(高重は左右を見かへる。押松丸、十六歳、童形の旅装束、蓑笠にて走り出づるを、高重は松明の

火に透しみる。)

高重。お、押松丸か。

押松。お、佐々木殿でござりましたか。大津の口には近頃關所をかまへ、通行の吟味むづかし

ければ、路を變へて澁谷より山越えしてまゐりました。

高重。して、早速ながら鎌倉表の首尾はどうぢやな。

押松。首尾は散々……。口惜うござる。

高重。なに、さんくぢやと……。さては露顯か。

押松。お身にもかねて御存じの通り、北條征伐の人数を驅り催す爲に、それがしは廻状を持參

して、日ごろ自慢の早足に毎日廿餘里を走り、五日目の夕刻には鎌倉に入込み、ひそかに

大小名の屋敷を訪ひめぐる中、憎いは三浦平六入道、うはべは一味こみせかけて、矢庭に

それがしを搦め取り、鎌倉の營中へひき出しました。

高重。お、三浦のために捕はれたか。

承久繪卷

押松。

かく相成つては最早致方もござりませぬ。たとひいかなる拷問に逢うても白状すまいとは存じたれど、證據の廻狀が已に敵の手に渡つたれば、無念ながら大事は露顯……。

(皆々おどろく。)

高重。

大事露顯とあれば、最早これまでぢや。今となつては忠案も工夫もない。先づ手はじめに伊賀判官を討ち取つて、朝敵退治の御旗を樹つるが肝要ぞ。

押松。

わたくしも左様存じます。早う御用意なされませ。なにはあれ、御所へ馳せ付けて、この趣を申上ぐるであらう。

高重。

(高重はあわて、行かんとするを、娘は取付く。)

卯の花。

あゝ、もし、父上。では、これからすぐに判官殿を……。

高重。

おゝ、かれは北條が腹心の者、先づ討ち取つて血祭ぢや。いかに朝敵の末ぢやと云うて、判官殿父子のお命だけは、助ける工夫はござりませぬか。今にも軍がはじまらば、お許嫁の壽王殿のお身の上も氣つかはれます。

秋野。

あのお方に萬一のことがあれば、わたくしは生きてはるませぬぞよ。(父に縋りて泣く。)さあ、父上。ひとりの娘を殺しても、おまへは功名手柄をしたいか。

秋野。

卯の花様が可愛うはござりませぬか。(語めよる。)

高重。

(持餘して) さりととは困つた奴等ぢやなう。わしが光季と縁組みしたは、かれの羽振がよいからぢや。と云うて、いつまでも彼の下に立つは快うない。折もあらば彼めを倒して、取つて代らうと思ふうちに、此度のおん企てぢや。首尾好うまれば光季は愚、北條の代りになられぬとも限るまい。これほどの運を握りながら、今さら婚の舅のと義理立てしてゐられうか。どうぢや、判つたか。

(優しく云ひ聞かすれど、卯の花は頭をふる。)

卯の花。

いや、いや、お前はどのやうな心であつたか知らぬが、わたくしは壽王どのを一生の夫と定めてゐました。夫を殺すが見てゐられうか。

秋野。

ほんにあなたのおつしやる通り、壽王殿は娘の許嫁ぢやと、お前さまの口から確に申されたではござりませぬか。

高野。

(急いで) はて、兎やかうと諄い奴……。よい、よい。そち達が左ほどに申すならば、光季は兎もあれ、壽王の命だけはかならず助けてくれう。

卯の花。

それは眞實でござりますか。

高重。

む、なにを云ふにも今はこゝろが急ぐ。委細はあとで語り聞かさう。押松、まるれ。

(高重は家來を見かへれば、家來は心得て松明を振り照し、高重押松等は足早に立去る。あとに残りし卯の花と秋野は吐息をつく。)

卯の花。

乳母、どうしたらよからうぞ。

秋野。

殿様もあのやうにお請合でござりますれば、壽王殿のお身に障りはござりますまい。あまりにお案じなされますな。

卯の花。

眞實、お身に障りはあるまいかなう。

秋野。

(案じ詫びつゝ、たゝすむ。雨降り出づ。)

お、雨が降つてまゐりました。強う降らぬうちに早う御参詣なされませ。

(卯の花は猶思案に沈みて立つ。社の奥より油坊主、竹笠を背負ひ、高下駄をはき、手に油壺を持ちて、石燈籠に油をさしつゝ、社前に来る。)

坊主。

(ひとり言。風のふく夜、雨のふる夜、悪魔の暴ぶる夜、人間の世は闇の底に葬られた。暗きを照らすは、神の御前の燈火ばかりぢや。

(風の音して、燈籠の火は一度に消ゆ。)

秋野。

さあお前様、早うおいでなされませ。こよひは百日の満願ではござりませぬか。まして今の折柄、ようお願ひ申さねばなりません。

卯の花。

ほんにさうぢや、こよひは満願といひ、壽王殿のお命にもかゝはる大事の時節。たとひ此身を贅にしても、あなたの御無事を祈らねばなるまい。

(兩人ゆかんとして心附く。)

卯の花。

お、いつの間にか燈火が消えた。

秋野。

あたりは俄に闇となりました。

(兩人は闇きに迷ふ風情。)

坊主。

お、御燈火がみな消えたか。さては今月今宵こそ人間に禍あるべき初めの日なれ。いまより十日、五十日、百日の間、世は常闇にうづまれて、西の都にかゝやく月も日も星も光をうしなひ、東の國より虎、獅子、狼、その他もろくの猛き獸、おびたゞしくこゝに群れあつまり、人を屠り、家を焼きて、悪魔は日本の王とならん。先づその生贅となるべきは、戀に命をさゝけたる二人の少女よ。

(云ひをばりて飄然として去る。卯の花と秋野は怪しみ恐れてそのゆくへを透し視る。雨の音、風

幕

第三幕

(一)

京極大路、伊賀判官の屋敷。二重屋體にて、正面は襖。庭には松の立木などあり。おなじく十五日の夜。

(伊賀の家來一、二、三、四の四人、烏帽子、直垂にて、燈臺の下に對坐す。おなじく家來一人、走り出づ。)

家來五、中納言光親の卿、お越しにござります。

家來一、お、すぐにこれへ御案内申せ。

家來五、はあ。

(家來は引返して去る。家來の一人はかくと主人に報せんために起つて奥に入る。他の家來等は縁を降りて地に坐す。奥より伊賀判官光季、烏帽子、直垂にて、兒小姓に太刀を持たせて出づ。)

光季、今宵は御所のお使ぢや。常のお客來とは違ふぞ、無禮のなきやうに心をつけよ。

家來、はあ。
(やがて中納言光親は水干を着たる童に太刀を持たせ、伊賀の家來に案内されて出づ。)

光季、中納言殿には先づぐこれへ。
お。

(光親は内に入る。伊賀の家來ども皆平伏す。)

光季、(つゝしんで)先刻使者を以て、公家衆のうち御一人、お越しを願ひ上げましたるところ、早速の御入來、ありがたう存じます。殊に餘人ならぬ中納言殿のお入りは、光季、一人入満足でござります。

光親、(打寛ぎて)いや、表向きより申さば、わしは御所のお使、お身は京の守護職、たがひにむづかしい式作法もあるべきぢやが、兎かく物事は肩胛張つて威めしう論じ合ふと、雙方の

光季。

底意が通じかねて、成る相談もならぬ例が屢々ある。お身とわしとは日ごろから疎くもあらぬ間柄ぢや。何事も打ち解けて語らうではないか。どうぢやな。

恐れ入りました。では、仰せに随ひまして、失禮御免くださりませ。さて今夕お越しをねがひましたるは餘の儀でもござりませぬ。近頃京家の方々のおん振舞に就きまして、わたくしには少しく落意しがたき條々もござりまするで、おたづね申上げたう存じまするが、一々お答へ下されませうか。

光親。

(微笑む。) なに、京家の振舞について、その意を得ぬことがあると申すか。それは不思議ぢや。なんなりとも遠慮なく問うてみい。

光季。

先づ第一には、近ごろ京家には鎌倉征伐のおん催しがあるとか承はりまする。果して右様の御評議がござりませうか。

光親。

は、これは又思ひも寄らぬことなう、京都は君、關東は家來、君が臣を誅するに改めて征伐の御評議などあらう筈がない。もし北條一門の者どもに不忠の振舞あらば、直ちに京に召寄せて、法のごとくに行はるゝまでぢや。

光季。

しかし自然合戦ともござりますれば、その御用意もござりませうか……。

光親。

いや、合戦といふものは、相手がなければ出来ぬものぢや。但しお身の主人北條の一門は京都に對して弓をひくか。

(光季はすこしく詰る。)

光親。

つまりは京わらんべの雜説で、根も葉もないことぢやよ。

光季。

では、更におたづね申します。このごろ御所に於かれましたは、丹波丹後その他近國の人数を召集められ、洛外に屯するもの已に一千餘人とかうけたまはりまするが、これは如何なる御用でござりまするか。

光親。

お身はまだ知らぬか。當月の末には、鳥羽の城南寺に於て流鏑馬のおん催しがある。それがために近國の武士を召されたのぢや。

光季。

京家の御沙汰として、近國より軍馬を徴され、また京浪花津の職人に、弓矢をあまた作らせられたは……。

光季。

前にも申した通り、流鏑馬なれば、馬も要らうわ、弓矢も要らうわ。

光季。

先頃より粟田口の鍛冶を御所に召され、百貫の鐵を百日のあひだに打ち縮めて、三尺三寸の太刀を作らせたまふ。右は北條を呪詛のためぢやと洩れうけたまはりましたが、この儀

光親。

は如何でござりまするな。
御所にて太刀を打たせられたは、確に相違ないことぢや。但しこれを以て呪ひといふは、あまりに淺はかぢやぞ。已に先頃鎌倉に於ても、郷のなにかしを營中に召して、二口の太刀をうたせたと聞いたが、それは誰を呪ひの爲ぢやな。は、な、な、なう、光季。あまりに疑心をいだいて、見るもの聞くものに氣配りすると、猫の聲も虎が吼ゆるやうにも聞ゆるものぢや、いはゆる疑心暗鬼を生ずとはこの事であらうぞ。

光季。

さらば最後におたづね申します。院の北面は武士十六人といふが定めでござりましたに先頃更に十人を増され、しかも別に西面といふをも置かれましたは、いかなる御趣意でござりまするか。洛中守護のおん爲には、不肖ながら光季控へ居りまするに、みだりに武士どもをお抱へあること、これ不審の第一にござりまする。

(光親もこれには少しく詰る。)

光季。

(曇みかけて。)しかもその北面西面の武士どもを相手として、公家衆が朝夕に、兵法劍術など稽古せらるゝは、重々の不審ではござりますまいか。

光親。

なにさまその不審はもつともぢや。北面の人数を増し、更に西面をも置かれたは、深き仔細があるのではない。つまりは上が武藝を好ませらるゝがためぢや、上の好むところ下これに倣ふとやらで、年若き公家衆が日長のつれづれに木太刀など持出して、たゞ何がなしに追ひつ追はれつ狂ひさわぐ。云は、小兒の戯れぢや。兵法の錬磨などいふべき筋のものでは無い。又まことに鎌倉征伐の御催しなどあるならば、然るべき大小名をもおん味方に頼まるゝ筈ぢや。百人にも足らぬ北面西面や、若公家衆の生兵法が、すはといふ時になんの役に立たうぞ。積つても知らるゝことぢやに……。光季、お身はなほ兎かう申すかな。

光季。

明白のおん申開き、一々相分りましてござりまする。若しおん申開き相立ざる節には、わたくしも役儀の表、京家の方々に對して相當の御仕向けをも致さねば相成るまいかと、ひそかに心を痛めて居りましたが、これにて先づは安堵つかまつりました。

光親。

む、では、ほかに不審は無いな。

光季。

はあ。光季はあづまの夷、まことに口不調法でござりますれば、口さきの戦ひでは、逆も逆もお前様にはかなひませぬ。(苦笑ひして)就きましては、今夕はもはやこれまでとして、ほかには何事も申し上げますまい。お使、御苦勞でござりました。

光親。

不審が晴るれば、わしも満足ぢや。萬が一にも些細のことより京鎌倉のあひだに弓矢の取

光季。合など起つたら、罪なき人を殺し、要なき財を費し、天下の民を苦しめねばなるまい。たがひに心して世の泰平を計らねばなるまいぞ。

光親。仰せの通りにござりまする。しかし京方にお前様があり、鎌倉方にわたくしが居りまする間は、ふたりが雙方の控へ綱で、滅多に事は起りますまい。

光季。お身の心はわしもよう知つて居る。又、わしのこゝろもお身は好う知つて居る筈ぢや。云ひあはさねど心を一つにして、天下のおん爲を計らうよ。さらば、光季。

光親。もうお立ちでござりまするか。

光親。御所の方々も待つて居られう。
（光親は座を起つ。光季は會釋す。この時、貝鐘の音遠くきこゆ。）
や、時ならぬ……貝鐘は……。

七郎。光親は素破や大事と打ちおどろく。上野七郎景房、走り出づ。

殿、洛外に屯したる近國の武士共、俄に御所に走せ參じて、今や勢ぞろひの最中……。蒼の風説では、當屋敷へ討手を向けらるゝと申しまする。
（息を切つて注進すれば、皆々いよゝ驚きさわぐを、光季しづかに見かへる。）

光季。おゝ、左様か、遠からずこの事あらんとは、光季もかねて察して居つた。かならず狼狽へ騒ぐまいぞ。

光親。（愾然として。）折角の苦心も水の泡ぢや。いまの今まで無事を計らうたお身と我とがたちまちにして敵となつた。光親の安否判然するまでは、輕々しう動くこと無用と固く戒めて置いたるに、はやまつて大事を仕出すとは……。光季、察しておくりやれ。
残念な儀でござりまするなう。

（兩人相見て嘆息す。伊賀の家來大勢、押取り刀にて走り出づ。）
家來甲。唯今の注進によれば、捨置きがたき京家の振舞。
家來乙。いはれ無きに軍を催し、討手を向けらるゝとは心得ず。
家來丙。光親の卿とて同じかたきの一人ぢや。
家來丁。このまゝには歸されませぬぞ。

光季。卿に對して、無禮すな。門前までお見送り申せ。
家來。はあ。

光親

(光親はしづかに縁より降立ち、伊賀の家来一人に送られて行きかけしが、又見かへる。)
光季、お身は討死の覺悟と見たが、この光親も懸てあとより行くであらう。冥土でかさねて對面せうぞ。

光季

はあ。閻魔の廳でお待ち申しまする。

光季

(光親黙然として去る。貝鐘の聲やうやく近く。)

やあ、者共。都に異變あるときは、屋形を枕に討死とは日ごろより覺悟の上ぢや。この期に及んで見ぐるしき死狀すな。なまぬるき京勢共、幾千人一度に寄せかかるとも、片端より切りまくつて、鎌倉武士の手並をみせうぞ。いづれも物の具の用意せよ。

家来一同。はあ。

(主従勇んで奥に走り入る。庭口より小夏走り來りて、あたりを見まはす。奥より壽王冠者、直垂の袖をくぐり、鎧を取つて投げかけたる體、弓を持ち出て出づ。)

壽王

(透しみる。)小夏殿でないか。どうしてこゝへはまゐられた。

小夏

どうしてか、自分にもわかりませぬ。たゞ夢のやうに走つて來ました。

壽王

討手の向ふを知らせに來て給つたか。

小夏

半响ほど前から御所のあたりは俄にさわがしく、八方から走せあつまる人馬の音、何事が起つたかと聞いてみれば、このお屋敷へ討手がむかふとの噂、さては一大事と氣もそゝろに宙を飛んで唯今こゝまで……。 (息を喘ませながら。)して、お前様はこれからどうなされうと思召すぞ。

壽王

今となつてなんの思案があらう。父をはじめとして一家主従、枕をならべて討死するまでのことぢや。お身達がこゝらに居つては、傍杖の怪我あやまちなど無いともかぎらぬ。敵寄せぬ間に早う行かれい。

小夏

はい。

壽王

こゝに居つては危いと申すに……。

小夏

危いも怖ろしいも厭ひませぬ。それよりも先づお前様におたづね申したいことがござります。

壽王

とは又、なにを……。

小夏

お前さまは佐々木殿の娘御と、許嫁ぢやと聞きましたが、その佐々木殿は今宵の討手の大將でござりますぞ。

壽王。む。さては佐々木が大将な。

小夏。いかに武士おやと云うて、大事の婿を殺しに来る佐々木殿。お前様はその娘を未來の妻ぢやと思つてござるか。

壽王。さあ。(思案して)親は親……むすめは娘ぢや。

小夏。では、おまへ様は未來までもあの娘御を見すてぬと云はるゝのか。さりとは恨めしい壽王殿……こゝにはお前に戀ひこがれて、捨ててもよい命を捨てに来た女子がある。まこととを云へばわたしは御所方、お前とは敵味方の仲なれど、あまり戀しさに堪へ兼ねて、わざ／＼一緒に死に、來ました。それでもこの小夏が憎うござるか。(詰めよる。)

壽王。それほどの志、なんで憎う思はうぞ。壽王、身にしみて嬉しうござるわ。

小夏。では、佐々木殿の娘御を……見捨てよと云はるゝか。

小夏。勿論のことぢや。わたしを可愛いとおほすなら、あの娘御を見捨てゝくださりませ。二道かけて戀するは、武士が二張の弓をひくも同様、近ごろ御卑怯でござりませうぞ。なに、卑怯ぢやと……。

小夏。お、戀の道も武士の道もおなじことぢや。お前が武士の道を立てゝ今宵討死なさるゝなら、戀の道をも立て通して、ほかの女子には目もくれぬと、わたしに誓うて下さりませ。

小夏。(この時、貝鐘亂調にひびく。壽王は縁先近く走り出でて、屹と視る。)

小夏。あれ、あの貝鐘は……佐々木どのが婿を殺しに来る知らせぢや。

小夏。(壽王は黙して立つ。貝鐘の音いよ／＼迫る。)

小夏。あれ、あれ、しだいに近いて来るは、婿の首を三方にのせて、功名顔する惡魔の叫びぢや。

壽王。(きつと思案して)親は親、むすめは娘と、今の今までは思つてゐたが、われも人間の淺ましき、親が憎ければ娘も憎うなつた。……卵の花のことは思ひ切らうぞ。

小夏。そりや眞實に……。

壽王。お、壽王冠者が一生の戀人は……小夏どの、お身と定めた。

(壽王は小夏の手を取る。小夏、よろこびて泣く。この時、矢飛び來つて柱に立つ。)

壽王。や、今の音は……。お、矢文とみゆるな。(立寄つて矢をぬき取り、結びたる文を披見して)こりや卵の花より送りし文ぢや。

小夏。
壽王。
小夏。
壽王。

なに、卯の花殿から……。尋常じんじやうに降参かうさんすれば、お身の命いのちだけはかならずお救すけひまゐらすべしとある。して、その御返事ごへんじは……。降参かうさんなどとは汚けがらはしや。む。文ふみを巻まき納なめて、再びまたもとの矢やに結びつける。一旦たんお身みと誓ちかうたからは、再びまた變へんぜぬ壽王じゆうわうの心底しんてい、證據しやうこをみせうぞ。いざ参まゐられい。

(二)

伊賀の屋敷、門前。幾株の柳茂れり。

(卯の花、かひなくしく扮装いんざうちて、半弓はんきゆうを持ちて立つ。)

卯の花。父上ちゆうじやうにおねがひ申まをして、壽王殿じゆうわうどののお命いのちだけは、恙つがなきやうに計はからうたが、なほ心許こころもとなさに討手うってよりも先まへまはつて、その由よしを矢文やふみで申まをしあげたが、首尾しゆびよう彼の人の手てに入いればよいが……。

(案あんじわづらひつゝ、伸のび上ありて内うちをうかゞふ。佐々木高重ささきたかしげは引立ひきたて烏帽子かぶと、鎧よろひにて、兜かぶとと松明たいまつとを

高重。

二人の家來ふたりけらいに持たせて出づ。人來ひときたれりと見て、卯の花は柳の木やなぎのきかげに忍しのぶ。

北條征伐ほつじやうせいぱつの血祭ちまじりとして、伊賀判官いがのはんぐわん光季みつせに討手うってを向けらる。先陣せんじんの大將たいしやうは佐々木左衛門尉ささきざゑもんゑい高重たかしげ。光季みつせ親子おやこ速すみかに降参かうさんせば、命いのちばかりは助たすけて取とらせう。もし敵對てきたいするに於おては、數かず千騎せんきを以もつて屋敷やしよを取りまき、たゞ一戰せんに攻め潰つぶすぞ。よくく分別ぶんべつして返答へんたふあれ。

(門もんに向むかつて呼よばはれば、たちまち門内もんないに弦音つるおとして、先刻せんこくの文ふみをむすびたる矢飛やとび來きたつて、高重たかしげの胸むねに立つ。)

家來。

や、殿とのには忽所きふしよを射いさせて……。

高重。

なに、これしきのへろく矢……。

(高重は矢やをひき抜ぬきたれども、痛手いたてに弱よりてどうと坐ます。家來けらいはおどろきて介抱かいほうす。卯の花は木かげより走り出いづ。)

卯の花。

父上ちゆうじやう……。お心をたしかに遊あそばしませ。(介抱かいほうしつゝ彼の矢やに目をつけ、手てにとりあげる。)

お、これはわたしが今射いまた矢やぢや。文ふみをもとの如ごとくに添そへて、門もんのうちより射返いしたは……。お、壽王じゆうわうどのに相違さうゐあるまい。わたしが心づくしの文ふみをも受取うけとらず、しかも父上ちゆうじやうを射たといふは、この父子おふこを飽あくまで敵てきとみて、縁えんを切きつたしるしぢやな。さうとは知しらずさま

高重。 さまの心づかひ、それも皆な仇となつた。(泣く)
卯の花。 (苦しげに。) 娘……。 壽王のことは思ひ切らうぞ。
あい。

高重。 (卯の花は彼の矢を逃手に取りて、われと我が咽喉を突く。)
卯の花。 や、娘は自害したか。……。 功名のために子を殺した。
戀のために親を殺した。

高重。 ゆるせ……。
卯の花。 堪忍してくださいませ。

家來甲。 (兩人相抱いて倒る。)
思ひもよらぬ殿の御最期……。

家來乙。 とりあへずこの次第を、左源二どにお知らせ申さう。

壽王。 (家來どもはあわて、引返す。門内より壽王冠者は弓を持ち出て、高重と卯の花との死骸をみる。)
今までは舅とたのみ、妻と思ひし二人の命を、たゞ一矢にて一度に斷つたか。

左源二。 (佐々木の家來唐崎左源二は軍兵大勢を率ゐて出づ。)
や、殿も……御息女も……。 む、この上は容赦におよばぬ。先づ壽王より討取つて、伊賀の一家を攻めほろぼせ。

軍兵。 はあ。

(軍兵は押取り籠めて撃つてかゝる。壽王は奮闘す。門内よりも伊賀の家來數人切つて出で、雙方混戦。)

(III)

もとの伊賀の屋敷。

(庭前には所々に篝火を焚かせ、内には光季をはじめ、上野七郎以下十餘人の家來、いづれも鎧を着けて坐し、小姓は銚子を取りて、最期の酒宴を開きゐる。)

光季。 (土器を取る。) 今は思ひ残すこともない。唯いさぎよう切死して、北條殿の恩顧に報ゆるのみぢや。

七 郎。 仰せの通りでござりまする。殿は北條殿のおん爲、我等はまた殿のおん爲に、今が最期の御奉公ぢや。しかし吹けば飛ぶやうな京侍、冥土の路連れには些と不足でござりまするな。はムムム。

光 季。 不足といふは一人と一人との相討なればこそぢや。一人で五十人百人を供にしたら、さのみ不足もあるまいよ。(打笑みながら耳をかたむける) 門前には太刀音矢叫びが頻りにきこゆるが、敵はもう寄せたな。

七 郎。 先陣は已に寄せかけました。若侍は一晌も堪へがたく、殿の御指圖をも待たずして、思ひ／＼に切つて出で、追ツつ巻ツつ今や合戦最中でござりまする。さすがは關東武士、みな勇ましいなう。

光 季。 (こゝろよげに打笑みて、杯をめぐらす折柄、奥より光季の次男次郎丸、十三歳、盲目。琵琶法師一に手をひかれて出づ。)

了 一。 殿様、思ひもよらぬ大事出来いたして、なんとも申上様もござりませぬ。
光 季。 おゝ、了一か。そちとも長い馴染であつたが、光季も今宵は討死ぢや。
次郎丸。 いよく御最期でござりまするか。父上、父上……。(さぐり寄る。)

光 季。 次郎丸。 お身には申し聞かすことがある。もそつと近う寄れ。今あらためて云ふまでもないが、この京都の公家衆と關東の武士とは、日ごろから兎角に仲が好うない。で、關東に對して、何時どのやうなことを仕向けぬともかぎらぬので、わしをその番人に遣された。わしは北條殿の縁者で、もとより關東の味方ではあるが、さりとて京の方々に辛く當らうとは思はぬ。なるべく無事に相濟むやうと、京鎌倉のあひだに立つて、けふまで危いとこ

ろを繋いで来たが、時のいきほひは是非ないので、いよく今度の騒動ぢや。京方では先づ伊賀の一家を血祭にして、それから關東へ討手を下さるゝ積りであらう。わしは日頃より覺悟の上、討手をひき受けて親子いさぎよく討死するが、兄の壽王とは違つて、お身は稚い、且は盲目不具の身ぢや。生残つたとて卑怯でもあるまい。親子三人の中お身だけは、こゝろを落ちのびて、父や兄の菩提を弔うてくれ。なう、了一。年來のよしみには次郎丸を隠まうて、世の鎮まるを待つて鎌倉へ名乗り出で、身のおちつきを計らうてはくれまいか。

了 一。 おたのみの筋はよう判りました。わたくしも年來の御恩報じに、次郎丸殿は確におあづかり申しまする。かならず御心配なされますな。

次郎丸。

(次郎丸は見えぬ目に溢る、涙をぬぐひて、父の膝に取りすがる。)
では、仰せに従ひまして、わたくしはこゝを落ちます。さむらひの子でありながら、果報つたなき盲目と生れ、ひとしほ御不便を加へてくだされました、その大恩を報ひもせず

光季。

に唯今おわかれ申すのは、悲しいこととござります。不具の子ほど可愛いと、世のことわざにも申す通り、日頃からお身を不便に思つて、せめては身を立つるよすがにもと、四年前より了一について琵琶を習はせ、その上達を喜んで居つたが、よくよく薄い親子の縁ぢや。

次郎丸。

就きましては、わたくしにお願ひがござります。年ごろ習ひおほえましたる平家琵琶を、この世のお別れに一段おきかせ申したう存じまするが……。

了一。

おゝ、好いところへお氣がおつきなされました。次郎丸殿がごごろの御上達は目覺しいものでござりまする。是非お名残にこゝで一段……。

七郎。

これはわれくも望むところぢや。それ、早う御用意、御用意。
(家來の一人はすぐに起つて奥に入る。)

光季。

なにさま今は最期の酒宴ぢや。酒のさかなに一段面白からう。

次郎丸。

して。なにを御所望でござります。

光季。

なになりとも此場にふさはしいものを語れ。

次郎丸。

お師匠様。なにが宜しうござりませうな。

了一。

さあ、平家の中でこの場にふさはしいは……。おゝ。木曾最期の切はどうでござらう。

光季。

むゝ。今井兼平討死は哀れに勇ましいものぢや。それよからう。

次郎丸。

では、兼平を語りませう。

了一。

(家來は奥より平家琵琶を持ちて出づ。)
若様。お父上の前でお名ごりの一段。お前さまに取つては一生の晴れの業でござりまするぞ。三重の甲、初重の乙、節ひとつにも御油断なさるな。
(次郎丸うなづきて琵琶を取り、平家の木曾最期の切を語る。)

今井の四郎は軍しけるが、これを聞きて、今は誰をか奪はんとて軍をばすべき。これ見たまへ、東國の殿倅、日本一の剛の者の自害する手本よとて、太刀の切先を口にふくみ、馬より逆に飛び落ち、貫ぬかつてぞ失せにける。

(この中、皆々耳をかたむけて聴く。感に堪へずして落涙する者あり。)

七郎。あつばれ妙手ぢや。折も折といひ、ひとしほ肺腑にしみ渡つて、われく覺えず落涙仕つた。

光季。今井は木曾殿のために斯ばかりに勇ましい最期を遂げた。われらも北條殿おん爲には、世をおどろかすほどの働きをせねばなるまい。

(貝鐘の音烈しくきこゆ。)

七郎。おゝ、敵もいよく近きました。もはや御猶豫は相成りませぬぞ。

光季。むゝ、さらば屋敷へ火をかけて、煙の中より一度に切つて出ようぞ。了一も次郎丸も早う落ちよ。

次郎丸。父上……父上……。

(また探り寄るを、光季は叩き退ける。)

光季。いつれも續け。はあ。

(光季は先に立ち、七郎等つゞきて走り去る。次郎丸は猶そのあとを追はんとするを、了一は支へそ。)

了一。お名残り惜いはお道理ぢやが、人の命はこの琵琶と同様、地水火風の四つの緒も、切れては空にかへる身ぢや。もうおあきらめなされませ。

(了一は次郎丸をなだめながら、その手をひきて奥に探り入る。門外には貝鐘の聲、人馬の音さわがしく、戦ひ今や酣なりとみゆ。壽王冠者は手負の體にて、小夏に扶けられて出づ。)

小夏。兎も角もあれまでおいでなされませ。

(壽王はうなづきて縁にどつと坐す。)

小夏。(あたりを見まはして) 最期の御酒宴ももう果てたと見えます。

壽王。では、父上にも討つて出られたか。今一度引返しておん供とは思へども、この深手ではもう叶はぬ。

(奥より黒煙うづ巻き出で、隅々より火焰も燃え出づ。)

小夏。おゝ、お屋形もいつの間にか火となつた。

壽王。死首を敵に渡すも無念……。とても死ぬならばあの火の中へ……。

小夏。ふたりが共に灰となりませうぞ。

壽王。おゝ。(小夏の手を把る。) わづか一响、みじかい戀ぢや。

小夏。

長うても短うても……。戀は勝つた。

(火いよ／＼燃え上る。兩人起つて奥の方へゆき、相抱いて火中に投ず。光季、大童になりて走り出す。)

光季。

お、壽王もはや最期を遂げたか。

光季。

(敵の軍兵むらがり出す。光季は縁に駆けあがりて罵る。)

光季一人を討ち取るとして何百人寄せて來ることぞ。かくても關東の大軍を敵として、軍がならうと思ふか。弱い奴等め。

光季。

(敵は競つて打つてかゝる。光季は多勢を相手に奮闘す。敵は支へかれて左右に退く。)

(血刀を杖にして。)今はこれまで……。兼平の申した通り、日本一の剛の者の最期はかうぢや。(太刀の切先を口にふくみ、頸まで突きつらぬきて倒る。家は焼くづれて、勇士の屍は火に包まれる。)

(四)

もとの門前。

(中納言光親、少納言忠信、中務少輔師安、いづれも狩衣に腹巻して床几にかゝり、軍兵大勢は旗を樹て、松明を持ちて控へたり。)

忠信。

屋敷の内より烟のあがるを見れば、光季親子もはや自滅と見えするな。

師安。

かれらがいかにか狂うとも多勢に無勢、また、く間にほろぶるは當然のことぢや。

(奥にあたりて火の手あがる。光親、悵然。)

光親。

勝利は一响……。あの火焰、あの烟が、やがて洛中を焼き盡さうも知れぬぞ。

(雨の音。光親は更に空を仰ぐ。)

光親。

お、又もや雨となつたか。熾なる火は雨のうちにも燃ゆるわ。光季と光親との水を以て火をふせがうと苦心したが、水の力足らずして、火はいよ／＼燃え上つた。われも人も焼かれて灰となるまでぢや。

(小蔭より次郎丸と了一忍ひ出づ。忠信は透しみる。)

忠信。

や、あれは……。

軍兵。

胡亂な奴。

承久繪卷

光親。

琵琶法師であらう。捨置け、捨置け。

(次郎丸と了一は闇にまぎれて走り去る。)

幕

義貞最期

明治四十三年八月作。

明治四十三年九月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——新田義貞（中村芝翫、後の歌右衛門）脇屋義助（市川高麗藏、後の松本幸四郎）瓜生兵庫助（中村又五郎）畑六郎左衛門（市川小團次）讚岐坊浄覺（市川左團次）侍女小萩（澤村宗之助）など

登場人物——新田左中將義貞。脇屋右衛門佐義助。瓜生兵庫助。後塚小八郎。金丸七郎。讚岐坊浄覺。畑六郎左衛門。結城又次郎。里見民部太郎。鳥山藤内。侍女小萩。農夫。軍兵など。

越前國、河合の庄、新田の陣所。粗木の屋體にて、軒に中黒の幕を張りまはし、庭の左右は柵矢來にて、おなじく中黒の陣幕を張る。すべて俄普請の陣屋の體なり。延元三年閏七月二日のゆふぐれ。
（結城又次郎、直垂、小手腰當にて縁先に机を控へ、矢立と帳面を置きて坐す。庭には金丸七郎、鳥山藤内の二人、おなじく直垂、小手腰當にて、矢立と帳面を持ちて立ち、農夫四五人ひざまづく。傍には草を束れたるを山のごとくに積みたり。）

七郎。これで残らず揃うたか。

農一。へい、へい。お指圖の通り、この近在七ヶ村申しあはせ。

農二。草といふ草は、残らず刈取つて持参いたしました。

義貞最期

藤内。

先刻の分をあはせて、草はめて三千束……よい、よい。

七郎。

これで用事はない。一同大儀であつたぞ。

農一。

では、お暇を致します。

藤内。

お、行け、ゆけ。

(農夫等は一禮して去る。)

七郎。

足羽の城は平城なれど、あたりに深田多ければ、人馬の駆引き自由ならず、明日の總攻めには片端より田をうづめて、通路を作れといふ御沙汰ぢや。

藤内。

その埋草もこれほど刈りあつめたれば、もはや懸念はござるまい。なほ不足の場所もあらば、楯を投げ込んで埋むるまでぢや。先づこれでわれ々の役目も濟んだ。

又次郎。

では、暫時休息いたさうか。藤内、まゐられい。

七郎。

む。

藤内。

む。

(七郎と藤内は去る。引き違へて雑兵一人出づ。)

兵一。

結城どのへ申上げます。加賀の國より富樫之介どの、唯今着到いたされました。

又次郎。

して、その人数は……。

兵一。

五百騎と申されました。

又次郎。

お、左様か。

(又次郎は着到帳に記せば、雑兵は一禮して去る。陣屋の奥より篠塚小八郎出で、これも又次郎の机のまへに坐す。)

小八郎。

着到の人数はどうでござるな。

又次郎。

これ見られい。近國の大小名は申すにおよばず、信濃上野越後よりも遙々着到の人数は已に三萬餘騎に上りましたぞ。

小八郎。

さりとはいさましい勢ひぢや。この人数で押寄せたら、あの小城は一揉みであらうよ。

(二人打笑む。雑兵又出づ。)

兵二。

申上げます。七尾より河田七郎どの、二千騎を率ゐて着到いたされました。

又次郎。

お、よし、よし。

(又もや帳に付ける。雑兵は一禮して去る。)

小八郎。

人数は一刻ごとに増すばかりぢや。

のかけより瓜生兵庫助、鎧姿にてうかゞひ出づ。

兵庫助、おのれ、待たうぞ。

(走りかゝつて引き戻すを、淨覺は振り拂つて行かんとす。兵庫助は太刀を抜き、兩人奮戦、兵庫助すこしく危く見えたるころへ、幕のかけより里見民部太郎、廿四五歳、おなじく鎧姿にて出で、かくと見るより生捕りにせんといふ心にて、傍につみたる埋草の大束をとりて、淨覺の足もとに投げつける。淨覺飛び越えんとしてつまづき倒るゝを、民部は透さず飛びかゝつて組み伏せる。奥より以前の七郎と藤内も走り出て、幕串の綱を取りて、淨覺を縛める。兵庫助は淨覺の顔をつゝみし袈裟をなぐり捨て、その顔を驚と見る。)

兵庫助、

むゝ。おのれは平泉寺の悪僧な。用心きびしき陣中へ忍び入るとは不敵な奴ぢや。仔細を申せ、仔細をいへ。

淨覺、

(冷笑ふ。)法師武者一人生捕つたればとて、さう物々しうは云はぬものぢやよ。お身等ごとき若者どもに、安々組み敷かるゝ我等でなければ、この草束に邪魔せられて、心ならずも不覺を取つたわ。

民部、

こやつの面魂、尋常のことでは白狀いたすまい。兎もかくも大將の御前へ牽かれい。

七郎、

心得申した。

(七郎起ちかゝる時、奥より新田義貞、引立烏帽子、緋袴の鎧、兒小姓に太刀を持たせ、家來に床几と敷皮を持たせて出づ。)

義貞、

七郎、その法師は……。

七郎、

案内もなく紛れ入つて、御座所間近う徘徊する曲者、かやうに搦め取つてござりまする。

義貞、

むゝ。

(義貞は敷皮を敷かせて床几にかゝれば、家來どもは一禮して奥に入る。淨覺は顔をあげて義貞の顔を見る。)

淨覺、

お身が新田どのか。

義貞、

いかにも義貞。して、御坊は……。

淨覺、

われらは平泉寺中にて、悪讀岐と呼ぼるゝ讀岐坊の淨覺。このたびの合戦に、大將義貞の首を見ざれば生きて再び還らじと、みづから誓うて出でたるに、運つたなうして斯うなつたわ。

義貞、

ついては、義貞不審に存する旨あり。このたび足利尾張守高經、足羽の城に楯籠りて、官

義貞最期

軍をふせがんと構ふる時、平泉寺の衆徒五百餘人、たちまちその味方に馳せ参じて、忍辱の袖をむすび、降魔の劍を磨ぎ、朝敵の足利に加勢するいはれは如何。王法佛法ふたつ無し、朝敵すなはち佛敵とは知られぬか。

淨覺

見らるゝごとく足羽の城は、藤島の庄と相ならびて、城廓半は彼の庄を籠めたり。しかるに、將尾張守より、もしわが平泉寺が味方するに於ては、右藤島の土地一圓を寺領として永下し置かるべき旨の判物をたまはる。たとひ朝敵といはゞ云へ、佛法の榮えを助くる人に、即ちわが友なり。友を救ふがためには命をも惜まぬが、われ／＼本來の趣意、些とも不思議はござるまい。

兵庫助

さりとは奇怪……。慾にくらみて朝敵を助くるなんと、法師の口より云ふべきことか。

民部

おのれ、その願を引き裂いてくれうぞ。

義貞

待て、待て。(と制して淨覺にむかひ) 事の理非はしばらく措いて、御坊等が城方に加勢するいはれも先づ一通りはきこえ申した。さりながら、猶かさねて申すことあり。義貞の人数は已にあつまるもの三萬餘騎、これをふせぐ城方は衆徒をあはせて千人に足らず。たとひ身命をなけうつて支へ戦ふとも、よく幾日をか堪へ申さうぞ。一旦運つきて落城せば、

淨覺

寺は焼かれ、僧は討たれ、あまつさへ末代までも朝敵の汚名を誣はれんこと、なんほう口惜しうはおほさぬか。ことに義貞は佛を尊む者、寺院を焼き、僧徒を殺すなどの悪行、いかに忍び難きところなり。御坊等も今に於てこゝろさしを翻へし、官軍のために粉骨の忠を致されなば……。

いや、いや、旗色の善惡をみて心をひるがへさば、それぞ即ち慾に眩むとも云ふべきぢや。一旦かうと誓ひしからは、城方と生死を俱にするが衆徒の意地、われ等は飽までも新田どのを佛敵と見るぞ。されば寺中の若きものは、足羽に下りて城に籠り、長老等は寺にとまりて、怨敵調伏の法をおこなふ。

七郎

なに。調伏ぢやと……。

淨覺

お、調伏よ、お身達はその修法といふをよう知るまい。調伏は五壇の法と唱へて、壇の中央には不動明王、東に降三世、西に大威徳、南に軍荼利、北に金剛夜叉、この五大明王が忿怒の尊像を安置し、護魔には木瓜、枳殼、白膠木の葉、茶蓂の折枝を燻べ、焼香には鶯の骨、蟹の甲を碎き、燈明には守宮の血、牝牛の涎をしほり、爐に燃え上る火焰のうちには、蜥蜴、くちなは、蜈蚣、蝦蟇のたぐひを、生けるがまゝに投げ入れて、むらさきの

火、青き煙の前に、苛高の珠敷を揉み立て揉みたて、一心をぬきんで油汗をそよいで、怨敵の命数たちまちに終らんことを祈るありさま、身の毛も彌立つばかりに凄じいぞよ。

(義貞、默然。)

民部。呪詛諸毒藥、還着於本人と、御佛は説かせられた。人を呪はゞ穴ふたつとか下世話に申すはこの事ぞ。

兵庫助。こゝろに一點の私し無く、忠義をはけむ者の上には、おのづからなる神佛の冥助あり。

七郎。おのれ等飽までも敵對の色目を見するならば、我々やがて駈向つて。

藤内。城も寺も一時に攻め潰さうぞ。その期に及んで後悔すな。

淨覺。それはお身達の心まかせぢや。今更ならねど勝負は時の運、この淨覺も運なければこそ、

かやうに新田どのを討ち洩したれ。さりとして、新田どの、武運強しとのみ思されな。平の將門は不動明王が降魔の矢先にかゝつた。新田どのも遠からず、調伏の奇特を思ひ知らうぞ。

七郎。えゝ、かへすぐも憎い奴。

藤内。おのれ、そのまゝには……。

(二人は起ちかゝる。奥より義貞の弟、脇屋右衛門佐義助、廿九歳、直垂、小手脛當にて出づ。)

義助。はやまるな。兩人。すこしく思ふ仔細もあれば、その法師にむざと成敗を加へまいぞ。兎もかくも奥へ引立てゆきて、取逃さぬやうに押籠めておけ。

民部。はあ。それ、起たうぞ。

(民部は先に立ち、七郎と藤内は淨覺を引つ立て、幕のかげへ牽いてゆく。)

兵庫助。あのやうな悪僧の五人三人、斬つて捨てたとて何ぞさらう。却つて敵への見せしめぢやに……。

義助。殺すは易いことぢや。急ぐにおよばぬ。(義貞に向ひて。)兄上、先陣よりはなんの注進もござらぬか。

義貞。けふはまだ何の沙汰もない。大方はいつもの小せり合であらうよ。

義助。敵は三方を取切られて逃るに途なく、必死をきはめたる籠城、味方も攻めあぐんで居るかとも見え申すぞ。ついては明日の御出馬、一先づ御猶豫相成つては……。

(奥より畑六郎左衛門出で、縁に堂乎と坐す。)

六郎左。それは我等が不得心でござるぞ。大將が後陣に引き下つて、たゞ重々と御座あつては、先

陣の鋒先もおのづと鈍つて、はかくしき軍も得成り申さぬ。その勇氣を勵ますためには、殿直々に御出馬あつて、驅引きのお指圖ねがはしう存する。

(義貞、黙して思案す。)

義助。

六郎左衛門の意見も一應はもつともながら、足羽は小城とはいへ、大將は尾張守高經、侮りがたき敵でござる。多勢をたのみて力攻めにいたす時はいたづらに味方を損ずるの虞あり。今日彼の法師を生捕つたるを幸ひ、今一應理解をくはへて、平泉寺の衆徒儕を味方にまねかば、敵はたちまち手足を失うて、おのづと弱るは必然かと存じまする。

六郎左。

手ぬるい、手ぬるい。あの小城ひとつ踏みやぶるに、智慧も計略も要ることか。さては殿、かの平泉寺の調伏とか云ふに聞き怯して、にはかに臆病風に附かれたな。なんの賣僧が……。女わらべを嚇すやうな、呪詛の、調伏のと……。聞くさへ腹が絞るゝわ。神がなんぢや、佛がなんぢや。畑六郎左衛門は、神も知らぬ、ほとけも知らぬ。人間の頼みとするは、唯だおのれの力ばかりぢや。佛の罰が何あらうかい。

義貞。

六郎左衛門、控へい。武勇に慢じて神佛を輕んずるは、其方が日ごろの癖ぢや。弟の意見、一々道理至極せり。急がずともおのづから落つべき城を、遮二無二攻め立て、人馬を損ず

兵庫助。

るは無益のことぢや。やあ、兵庫助。其方これより先陣へ走せつけ、義貞があらためて沙汰するまでは、みだりに懸ること無用と觸れわたせ。

六郎左。

この上は論は無益ぢや。容易に埒のあかぬ氣長軍、われ等も窮屈の鎧を解いて、宵から高野で寝まらうか。

(六郎左衛門は縁より庭に降り立ちて、幕のかげに入る。)

義助。

兄上。畑めが例の大燥急、御出陣延引とうけたまはつて、面影らして往に申したわ。(うち笑む。)

義貞。

(さびしく笑ふ。) 燥るは六郎左衛門ばかりでない。義貞も兎かくに勝を急いで、其方にもたびく控へられたが、けふは何故か心が進まぬ。われながら不思議に思ふぞ。

義助。

左様おほしめさば猶以て御愼みが専一でござる。軍はけふ明日にかぎりませぬ。先づこの趣を、旗下の面々にも觸れ申さう。(起ち上りて。) おゝ、けふもやがて暮れ申すわ。誰かある、かゝりを焚け。

義貞 最期

（呼びすて、奥に入る。入相の鐘きこゆ。雑兵二人出て来りて、庭さきに鎌を焚き、一禮して去る。陣中寂寞、をり／＼に軍馬の響の音きこゆ。義貞黙して坐す。雑兵二人、小萩を案内して出づ。）
 小萩よりお使でござります。〔言上して去る。〕

兵一。めづらしや、小萩。この北國へはる／＼の下向、仔細はどうぢや。これへ、これへ。

（小萩は縁にのぼりて手を支へる。）

小萩。殿にはいつも麗はしき御氣色、先づおめでたう存じまする。

義貞。内侍にも別條ないか。

小萩。京北國と隔たりて、殿のおたよりも委しうきこえませねば、内侍様には唯そののみを嘆か

せたまひて、明けても涙、暮れても涙、あまりのお悼はしさを見るに堪へ兼ねて、わたくし一人が姿をやつして下りました。

そち一人で北國まで下つたか。

その道中でもさまざまの艱難。やう／＼と山までたづね着きますれば、殿はもはや御出陣、女子の身で戰場へ近寄るは危しと、人々の制しとむるを振切つて、城内の武士に送られ、今日これまでまゐりました。（襟にかけたる錦の守袋より一封の文をとり出す。）これは内侍様の

義貞。
小萩。

お文、よう御覽くださりませ。

（義貞はその文をうけ取りて、忙はしく封をひらき、よみ終りて情に堪へざるものゝ如し。空に雁の聲きこゆ。義貞は空を仰ぎて悵然。）

義貞。

世は秋となつた。雲井を渡るかりがねも、秋風ふけば北を去るに、われはいつまでか北國にさすらひ、秋來れども歸り得ず、鎧かたしく夜半の夢、いたづらに都へ通ふのみぢや。内侍と袂を分らしも、かぞふれば早や三年のむかしにて、かれも慕はん、我もなつかしう思へども、みだれたる世の道中も容易からず、且は人々の思惑をもはかりて、迎ひをも上せず、たよりをも送らず、けふまで空しく過しつるぞ。小萩、察してお呉りやれ。

小萩。

それは内侍様もようお察しなされては居りまするが、積る思ひに身も瘦せて、このまゝ月日を経るならば、こがれて死なうも知れぬとの仰せ……。

義貞。

おゝ、この文にも記してある。（再び文をよみ返す。）苦しき浮世にながらへて何かせんと、泣いてあかさぬ夜半とても無けれど、さすがに消えぬ露の身なれば、生甲斐もなく日を送る……。

（讀みかけて嘆息す。小萩もなみだを拭ふ。）

小萩。

そのお嘆きを明暮れに、傍で見まらするわたくしの切なさ……。殿……。

義貞。

お。

小萩。

一日も早う軍をやめて、都へお歸りくださりませ。江州は堅田の浦、苦屋の奥に住みわびて、秋風さむき此頃の、夜を泣きあかす内侍様を、あはれと思召されぬか。

義貞。

む。又もや文を打眺めて。なう、小萩。内侍のなけきを聞くにつけて、われも心は飛び立てども、思ふにまかせぬ世の習ぞ。今や北國ごとく我手に入りて、あますは足羽の城一つ、これを見すて、歸らんこと、一族外様の思惑も憚りあり。往ぬる建武の末、尊氏が西海へ落ちたる時にも、義貞直ちに追ひ下らず、あたら軍の圖をはつせしは、内侍と暫しの別れを惜みしがためぞと、ひそかに嘲けり笑ふ者もありとか聞く。然るに今また内侍の愛にひかされて取るべき城をも得取らずして、おめく引揚けしなんときこえ渡らば、味方のみかは、敵の物笑ひともなるであらう。それも近頃無念でなう。では、足羽の城が落ちませいで……。内侍と相見することも叶ふまじきぞ。早くても一月……おそくば二月三月……。

小萩。

義貞。

小萩。

一日千秋の思ひとやら申しますれば、一月二月も十年廿年に彌増して、待ちわびたまふ内

義貞。

侍様のおん嘆きを、察しまるらするも涙の種……。とあつて、殿の仰せも一々御道理、わたくし風情が推して申上ぐべきやうもござりませぬ。たゞ一日も早う、目前の敵をほろほす御工夫がねがはしう存じまする。

それは云ふまでもないことぢやが……。義助の意見もあり、軍をいそぐは不覺であらう。さりとして、遠巻にして敵の疲るゝを待つと云ふも、今となつては悶かしい。(文を見てひとり言。内侍……。味方の思惑……。敵……。大事の軍……。

(たちまち向ふにて貝鐘の音きこゆ。義貞、夢の醒めたるごとくに屹と向うを見る。)

小萩。

や、あの貝鐘は……。

義貞。

いや、騒ぐまい。察する所、先陣の味方が城にむかつて戦ひを挑むとみゆるぞ。

(瓜生兵庫助、走り出づ。)

兵庫助。

御注進さふ。

義貞。

お、兵庫助。注進の次第、確と申せ。

兵庫助。

平泉寺の衆徒が楯籠りたる藤島の城、以てのほかに色めき渡りて、やがて落つべくも見えて候ふ間、先づこの城より攻めおとせと、競ひ立つたる先陣の人々は、それがし制すれど

義貞最期

義貞。も肯かばこそ、いづれも先を争うて走せ向ふ。

兵庫助。

して、藤島の城は落ちたか。
一旦退色に見えたる敵も、逃ぐる方なしとや思ひけん、必死となつて防ぎ戦ふ。あたりは深田にして駈引不便なり、味方は次第に追ひまくられ、無念ながら七八町が程も退き申した。

義貞。

おゝ。

六郎左。

(義貞は心ならざる體。幕のかけより畑六郎左衛門 長刀をかいこみて跳り出づ。)

やあ、殿。さればこそ我等の云はぬことか。生ぬるい評定に目を移して、多寡の知れたる法師武者に、追ん卷らるゝとは何たるさまぢや。さりとは齒痒い。この上は人をたのまぬ。われ等一人で駈けむかひ、片端より蹴散してくるゝわ。(罵り憤りて走せ行かんとす。)

義貞。

六郎左衛門、待て。義貞も共に行かうぞ。

兵庫助。

や、殿も御出馬……。

義貞。

この上は思案も工夫もない。藤島はいふに及ばず、足羽黒丸の城々を、片端より揉み潰して、今宵のうちに埒をあけうぞ。馬、牽け。

兵庫助。

はあ。

(兵庫助、幕のかけに走り入る。)

六郎左。

さすがは殿ぢや。よう思ひ切られたな。

(義貞起つて小姓に持たせたる太刀を取り、わが腰に佩びながら、口早にいふ。)

義貞。

小萩、これより城を攻め落して、義貞は先づ柚山へ歸り、やがて都へ歸るぞ。

小萩。

さうなりますれば内侍様もさぞお喜びでござりませう。

義貞。

やがて内侍に對面せうわ。

(雨の音微かにきこゆ。奥より脇屋義助出づ。)

義助。

これは何事でござる。出陣は一旦思ひ止らせられたに……。

(義貞、答へず。義助は小萩に目をつける。)

義助。

兄上、この女子は……。

(義貞は答へず。)

小萩。

見忘れられたか、右衛門佐どの。わたくしは内侍様のおん側近う召さるゝ者……。

義助。

おゝ、小萩とやらか。

義貞最期

綺堂戯曲集
鐙の火きゆ

三五四

—幕—

隅田川心中

大正五年五月作。

大正五年六月、歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割——俳諧師馬角（市川左升）水神の伊之助（市川壽美藏）
藝者おみの（阪東秀調）遊女雛琴（市川松蔭）禿まつ代（片岡千代磨）荒木勾當
（市川左團次）など。
初演當時は「心中」の外題を許可せられなかつたので、更に「風流一代
噺」と改題して上演した。

登場人物——荒木勾當、俳諧師馬角、桔梗屋のせがれ長三郎、水神の伊之助、辯間櫻川
あん孝、櫻川五樂、櫻川のん平、大七の女中おきよ、おせん、おたつ。兵庫屋の遊女雛琴。
新道雛衣、雛鳥。禿まつ代。仲の町藝者おみの、おなか、おさち、おとよ。兵庫屋の若い
者源助。喜七など。

(1)

文政四年、三月中旬の夕刻。

向島の料理茶屋、大七の座敷。廣くして風雅なる二重屋體にて、上のかたに床の間、遊び棚、つゞ
いて出入りの袂あり。庭には石燈籠、飛び石などありて、庭一ぱいの櫻は春酣なる風情をみせた
り。

（床の間の前には荒木勾當、豪奢潤達ごうしゃじゆんたつの盲人、卅五六歳、脇息わきせきによりて蒲團ふとんに坐し、その隣となりによし

原兵庫屋の遊女雛琴、十九歳、けふの引祝ひの主人公にて、おなじく蒲團に坐す。これにつゞいて新造雛衣、雛鳥、禿まつ代、仲の町藝者おみの、おなか、おきち、おとよの七人居ならび、大士の女中おきよ、おせん、おたつの三人もまじりて酌に立ち、大酒盛の體にてみな酔つてゐる。俳諧師馬角は坊主あたまにて雛琴が仕着せの黒紋附の羽織をかされ、下のかたの縁先に坐し、庭の上下には毛氈をかけた床几を持ち出して、上のかたの床几には男藝者櫻川五樂が腰をかけ、下のかたの床几には引手茶屋のせがれ長三郎、兵庫屋の若い者源助、喜七が腰をかけてゐる。男藝者櫻川あん孝、櫻川のん平の二人は羽織をぬぎて肌ぬぎになつて庭先に踊つてゐる。これ等の男はすべて雛琴が仕着せの羽織を着てゐる。

(唄ひながら踊る。) 高い山から谷底みれば、瓜や茄子の花ざかり。

(五樂も一緒になつて唄ひ囃す。)

勾當。

あん孝。

のん平。

おみの。

(さかづきを把りて。) これ、これ、二人とも草臥れたであらう。好加減にして一息つけ。

はい、はい。(汗をふく。)

おまへさん達も随分智慧がないんだね。同じ藝當でももう少しなにか粹なものがあらうぢやないか。

馬角。

いや、いや、そのやうに吐りたまふな。われ／＼俳諧師でも覺えのあることで、一度に五十句百句吐きとなれば、二本目は與市も困る扇かなで、さう／＼名吟ばかりは浮ばぬ道理だ。

あん孝。

宗匠のお説の通り、なにしろ朝から立てつゞけの藝盡しで、なにも彼も種切れになつてしまひました。

五樂。

よんどころなく工夫に工夫をいたし、お武家ならば具足金といふところを取出して……。

馬角。

おつと待ちたまへ。物いへば口唇さむし秋の風で、その具足金といふ隠し藝が高い山から谷底見ればでは、いかに最良の手前でも取りなしの仕様がござらんで。は／＼／＼／＼。

勾當。

なにしろ二人にさかづきを遣らう。

のん平。

はい、はい、それははや有難い儀で……。 (肌を入れて縁にあがつて来る。)

勾當。

(杯をあたへる。) これ、雛琴、あん孝とのん平に肴をやれ。

あん孝。

や、これは一人が十兩づつ。

(うしろにある金箱より小判をとり出し、紙の上ののせて遣る。)

五樂。

え、十兩……。(思はず起つてのぞく。)

勾當。

少ないか。(笑ふ。)

のん平。

飛んでもないことでござります。(頂く。)

あん孝。

ありがたく御返杯つかまつります。(二人は庭に降りる。)

勾當。

五樂はどうした。さつきから聲がきこえぬやうだが……。もう歸つたか。

五樂。

(大きい聲。はい、はい。五樂はこれに控へてをります。)

勾當。

さういふ奴だ。あれにも遣れ。

雛琴。

もし、五樂さん。(おなじく金を遣る。)

五樂。

ありがたく頂戴いたします。

長三郎。

かういふ時にはわたくしどものやうな藝無し猿は指をくはへて見てゐるばかり、太夫さん

達は羨ましくござります。

源助。

高い山から位なら俺達にも出来さうなものやうな藝無し猿は指をくはへて見てゐるばかり、(よろしくしながら踊る真似をする。)

喜七。

止せ、よせ。素人の藝ぢやあ賣物にならねえ。

勾當。

さう恨みつほく申さずとも、こゝにゐる者には誰彼無しにみんな十兩づつの祝儀を遣る。

おなか。

そんならあの、わたくし共にも……。

おきち。

小判を十枚づつでございますか。

おとよ。

まるで夢のやうでございますねえ。

勾當。

それもみんな雛琴の身祝ひだ。十六の初店からあしかけ四年通ひとほして、随分派手な遊

びもしたが、今度いよく請出すことになつたに就いては、仲の町の茶屋へは軒別に赤飯と鯉節をくばらせ、よし原中の藝者太鼓持には揃ひの仕着せを出した。そのなかでも日頃なじみの深いこれだけの者は、けふ改めてこゝへ呼んで、朝から夜まで賑かに飲みあかすと云ふ趣向だから、遠慮無しにもつと飲み、飲み。

一同。

はい、はい。

おみの。

このごろの身うけと云へば、親許身請けと名を付けて、こつそり廓を出るのが多いに、かうした派手な引祝ひは何年にも聞いたことがございませんよ。

雛衣。

ほんたうに廓中でも毎日々々その噂ばかり。

雛鳥。

花魁の御仕合せを羨まない者はござんせん。

まつ代。

姉さまが出世なされて、わたしも肩身が廣うござんす。

舞 琴。

たんと羨んで貰ひたさに、主とも色々相談して、できるだけ派手にした今度の引祝い、もうこれで思ひ残すこともござんせぬ。

勾 當。

この女を請出してしまへば、おれも一生の遊び仕舞、云は、浮世の見納めだから、出来るだけ派手に派手をつくして、人間の榮華歡樂を一度にあつめてみたいと思ひ立つたが、扱てこれと云ふ工夫もない。先づこゝらが行止まりであらうかなう。

馬 角。

榮華歡樂と申したところで、所詮うき世は色と酒、酒なくて何のおのれが櫻かなで、それが思ふまゝにさへなれば、些とも申分はござりませぬ。

勾 當。

宗匠もさう思ふか。

馬 角。

たとひ一日でもこれほどの榮耀を盡しますれば、死んでも宜しうござります。

勾 當。

(笑ふ)死んでもいゝか。

(勾當は酒を飲み、女どもは酌をする。下のかたより遊び人水神の伊之助、廿五六歳、つかく出づ。)

長三郎。

(起つて遮る)おい、誰だ、誰だ、案内も無しにこゝへ這入つて來なすつたのは……。おまへは水神の伊之さんとやらぢやあないか。

源 助。

ちけえねえ、伊之さんだ。

(喜七と顔を見あはせて忌な奴が來たといふ思入、おみのも驚く。)

喜 七。

なんの用だか知らねえが、又出直して來るがいゝぜ。

伊之助。

なんの用だか知らねえで、お前達は木戸を突くのか。おめえ達に物を云ひに來たんぢやねえ。引込んでゐるが可いや。

長三郎。

それぢやあ誰に用があつて來なすつたのだ。

伊之助。

その床の間の前に納まつてゐる、旨の旦那に逢ひに來たのだ。(縁に腰をかける)どなたも眞平御免くださいせえ。

馬 角。

(じろく)視る。なんだか穩かならぬ人物だが、旦那に御用があるならば手前が取次いで遣るまいものでもない。して、その用といふのは……。

伊之助。

お前さんに判るかえ。(せゝら笑ふ)だが、まあ話は早えが可いから、云へと云ふなら云つて聞かさう。もし、お前さん。こゝはどことと思ひなさる。

馬 角。

知れたこと、こゝは花の向島だ。

伊之助。

花の向島と知つてゐるなら、なぜこの伊之助が、繩張内へのんこで大勢乗込んで、世間か

まはすに騒ぎなされるのだ。

おみの。(前へ出る)もし、伊之助さん。お前こゝへ来てそんなことを……。 (眼で制する。)

伊之助。え、黙つてゐる。いつもとは譯が違はあ。

おみの。だつて、お前、困るぢやあないか。後生だから歸つておくんなさいよ。

あん孝。(起つて出る)失禮ながらこれはお前さんの筋が違ふやうに思はれるが……。江戸中の人

遊びに来るこの向島で、唄はうが騒がうが此方の勝手次第といふものだ。

五 樂。わたしも御客人のお供をして、度々この土地へも來てゐるが、たゞの一度もお前さん達か

ら兎やかう云はれた覚えはない。

伊之助。これが世間なみの花見遊山なら、だれも文句を云やあしねえが、相手は奥州の金山へ何萬

兩をつぎ込んだと噂の高い荒木勾當。よし原の女を六百兩で請け出して、氣の弱えものは

眼をまはすほどに派手を盡した引祝ひ、それも向う河岸ですることなら、おれも黙つて見

てゐるが、けふは大勢を狩りあつめて、山谷堀から舟を出し、この向島へ乗付けて、陀々

羅大盡の全盛遊び、それほど目出たえお祝ひなら、先祖代々土地つ子の、この伊之助にも

一應は、御挨拶があつても可ささうだが、いまだに知らん顔をしてゐるとは、なんほ檢校

馬角。

でも勾當でも人を旨にした仕方だ。

いや、それが筋違ひといふものだ。おまへも廓の人間なら文句をいふのもきこえてゐるが、

ほか土地の者にまで、一々引祝ひの挨拶が、出来るものか出来ないものか、積つて見ても

知れたことだ。そんな野暮を云はないで、おとなしく歸つた方が無事であらう。花に風、

そこ退きたまへ喧嘩買。

伊之助。

忌だ、いやだ。ほか土地と云つてもこゝは俺の繩張りだ。こゝへ來て引祝ひをするからに

やあ、渡りをつけるのは御定法だ。お前ぢやあやつぱり判らねえ。もし勾當さん、いやさ

荒木の旦那。一體どうしてお臭んなされるのだ。

引祝ひの挨拶と云つたところで、多寡が金の無心合力、五兩か十兩も遣つて歸れと云つた

ら、二つ返事で引込むだらうが、遊興の席へ押して來て、強面で取つて行かうとは、あん

まり可愛くない奴だ。びた一文も遣れぬから然う思へ。これが博奕か花會ならば知らぬこ

と。おれが金でおれが勝手に、天下晴れて遊ぶのに、貴様達からかれこれと因縁を付けら

れる覚えはない。これ、長三郎はるぬか。

はい、はい。

長三郎。

隅田川心中

勾當。まだ葉櫻にもならないのに、飛んだ毛蟲が舞ひ込んだ。早く摘み出してしまへ。

伊之助。なんだと……。
(伊之助は屹となるを、長三郎駈け寄つて抱きとめる。)

長三郎。これ、伊之さん。さつきから聞く通り、けふはお前の理窟は立たない。人間は見切りが肝心だ。足もとの明るいうちに、素直に早く歸つたらよからうぜ。

伊之助。え、大きにお世話だ。歸らねえと云つたら何うするのだ。
(屹となる。どうするものか。これほど云つて聞かしてもお前がいつまでも寢惚けてゐるなら、これから堤下へいよびいて行つて、面を洗つて遣るばかりだ。)

長三郎。まだ雛つ子の癖をして、しやれたことを云やあがるな。(長三郎の横面をなぐる。)

伊之助。うぬ、もう料簡が出来ねえぞ。
(ふたりは掴み合になる。禿は怖いと泣く。一同はうろくして見てゐる。おみのは堪り兼ねて庭へ駈け降りる。)

おみの。まあ、待つて下さいよ。伊之さんもお待ちといふのに……。

源七。かまはねえ。遣つちまへ、遣つちまへ。

伊之助。さあ、おれも水神の伊之助だ。殺すなら殺せ、殺せ。

おみの。まあ、お前。静かにおしなさいよ。ほんたうに困るぢやないか。不慮から色々御世話になる荒木様のお座敷へ来て、おまへがこんな亂暴をして呉れちやあ、わたしまでが同腹にでもなつてゐるやうで、旦那にも花魁にも申譯がない。もう奸加減にしてお呉んなさいよ。

伊之助。手前がどんなに世話にならうとも、おれの知つたことぢやあねえ。さあ、殺すなら殺してくれ。下手人はそこにゐる荒木勾當だ。いざといふ時にやあ手前が證人になるんだぞ。

おみの。ばかくしい。お止しといふのに……。

雛琴。その伊之助とかいふ人を、おみさんは知つてゐるのでござんすかえ。

おみの。え。

五樂。その伊之助は、おみさんの……。

おみの。あれ、黙つてゐて下さいよ。

勾當。む、さうか。(うなづく。)向島邊に男があるとか聞いてゐるが、これ、おみの。それがその男か。眼明きには吝な奴が多いな。

おみの。面目次第もございませぬ。さあ、伊之さん。けふはお前が悪いんだから仕方がない。頼むから素直に歸つておくんないよ。

長三郎。どうしても歸らなきやあ……。 (又立ちかゝる。)

おみの。あれ、もう堪忍して遣つて下さいよ。さあ、伊之さん、焦つたい人だねえ。どうせお前

ひとりで敵やあしなないから、旦那にあやまつてお歸りよ。

伊之助。 (おみのを突き倒す。べらぼうめ。なぐられたり、あやまつたりして堪るものか。 (たち上る) やい、盲坊主。この意趣返しには屹と来るから覚えてるろ。

おみの。あれ、お待ちよ。

(伊之助は口惜さうに足早に出てゆくを、おみのは追つてゆく。時の鐘きこゆ。)

おきよ。今のさわぎで忘れて居りました。

おせん。どれ、おあかりを持つてまゐりませう。

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

勾當。もう日が暮れたか。仕たい三昧のことをして、けふは一日面白く遊んだ。

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

(おきよ、おせん、おみつは奥に入る。風の音して櫻ちる。)

馬角

先づ兎もかくも一人頭に十兩づつ割り付けて、残れば又その時に追ひ増した。

難衣

馬角さんの勘定ではよつほど気をつけねばなりません。

難鳥

油断してゐたら、どんな手妻を遣はうも知れませぬぞ。

馬角

怪しからぬことを云ふものかな、手前はこの通りに正直正當、とんだ皿屋敷だが、それ、一枚、二枚、三枚……。

長三郎

(小判を数へながら一枚をそつと袖口から袂に忍ばせる。)

いや、するいぞ、するいぞ。あの通り、宗匠は袂に一枚すり込んだぞ。(馬角の袂をとらへる。)

馬角

南無三、手妻の種が露顯したか。

源助

こりやあまつたく油断が出来ねえ。

喜七

みんな寄つて眼張れ、眼張れ。

(一同は額をつき出して、馬角の勘定をながめてゐる。このあひだに難琴は勾當の手をとつて竊と奥に入る。一同はそれに気が注がず、夢中で金をかぞへるのを見物してゐる。奥よりおきよ等三人は燭臺を持ち出て出づ。)

馬角

一同

さあ、さあ、御祝儀を下さるぞ。皆なありがたく頂戴したらよからう。ありがたうございます。

馬角

(馬角は一同に十兩づつ渡す。)

これは手前が頂戴いたす。(自分もその一人分を懐中する。おみのさんはどこへ行つたか、兎もかくもこれは預かつて置かう。(また一人分を懐中して更に金箱をのぞく。)) さて、まだあとに百七十八兩ある。これでこの家の勘定を拂つたところで、まだよほど残るに相違ない。いつそこれから銘々が藝盡しを遣つて、上手下手を問はず、なんでも面白かつたものに相當の褒美を出すことにしたら何うであらう。で、先づ發議者の手前がお得意の清元をお聴きに達します。おなかさん、御苦勞ながら糸をおたのみ申す。その代り御褒美は分けて下さるんでせうね。さもししいことを宣ふな。めつたに聞かされぬ大事の隠し藝だが、今夜は懲と二人づれで、

馬角

おなか

さあ、さあ、始り、はじまり。

(馬角は扇を取り直して居直る。おなかは三味線の調子をあげせる。)

萬兩十萬兩は濕手で粟のつかみ取り、國持大名ほどの大身代になつて、小金をせよる座頭仲間は勿論のこと、世間の目明きどもの眼玉を剝かしてやらうと思つてゐたが、まんまと外れた山仕事、乗リかゝつた船であとへは引かれず、だんくんに損の上塗りをして、金山からは掘出す金もなく、借りた金が却つて山となつた。

舞琴。

えびす講のほかには滅多に聞いたこともない四萬兩、五萬兩、それほどの元手をかけた奥州の金山から、ちつとも金が出ぬといふのは、よく／＼運のないのでござんせうな。

勾當。

運のないのは自分があきらめれば済むが、済まぬのはその元手に注ぎ込んだ金の始末で、もう斯うなつてはおれの腕でも流石にあがきは付かぬ。いくら膽玉ばかりが大きくても、おれもやつぱり人間の悲しさ、四萬兩五萬兩といふ借金の重みに押潰されて、あはれや俺もたうとう自滅だ。京橋八丁堀の屋敷も遠からず人手に渡せば、おれももう宿無し、乞食するよりは死んだがましだ。年の若いお前までを一緒に連れてゆくのは氣の毒だが、これも約束とあきらめて、遠い冥土まで盲の手を曳いてくれ。(云ひかけて耳をかたむける。)これ、誰か來はせぬか。

(舞琴は再び起つて左右をうかがふ。)

舞琴。

いえ。

勾當。

(また疑ふやうに。)たしかに居ぬか。はてな。(首をかしげる。)

舞琴。

なんぼ感の好いお前でも、空耳といふこともござんせう。いつぞやもお前に話した通り、わたしの家の潰れたのは座頭金を借りたが基で、座頭はかたきも同然だと、父さんも母さんも死ぬ際まで云ひ暮してゐなさんした。その娘のわたしが廊へ賣られて、突出しの晩のお客は眼のみえぬ人、たとひ檢校でも勾當でもおなじ座頭の仲間だと思へば、お前がやつぱり仇のやうに憎うござんした。

勾當。

思ひ出しても忌々しいほどに初會は手ひどく振付けられた。併しおれも片意地者だ。根よく弾情に通ふうちに……。 (探りながらに舞琴の手を取る。) たうとうお前が負けてしまつた。

(笑ふ。)

舞琴。

憎い憎いと思ひながら、派手な氣性が面白さに、ついうか／＼と釣り込まれ……。 果は一緒に命まで捨てるやうに……。 ほ、今更そんな愚癡らしい昔話、ほんに馬鹿らしいござんすな。(笑ふ。)

勾當。

まだ物心が付くか付かぬに、兩眼みえぬ不具となつたが、持つて生まれた強情と、派手を

好む氣性から、大抵の目明きも及ばぬほどの榮耀や道樂を仕盡して、可愛い女と一緒に死ぬ。おれもよつほど果報者だ。は、は、は。

(下のかたにて清元を唄ふ聲きこゆ。)

清元 〽かすみの衣えもん坂、衣紋つくらふ初買の、袂ゆたかに大門の、花の江戸町京町や、脊中あはせの松飾り。

勾當 座敷では淨瑠璃が始まつたやうだな。お、あれは馬角の聲らしい。彼奴、なか／＼好い喉を持つてゐる。下手な發句など作つてゐるよりも、いつそ清元の太夫になれば可いに……。料簡のわからぬ男だ。

雜琴 あれ、だまつてお聞きなさんせ。わたしの好きな北洲でござんすよ。(起ちあがる。)

勾當 〽、北洲か。

清元 〽いよし御見の文月の、なき玉菊の燈籠に、星の癡話言さめ言、銀河と聞けばしろくと、白かたびらの袖にそよく。

(雜琴は勾當の手をひきて、あれを聴くと下のかたへ連れてゆく。)

勾當 〽ふだんから自慢するだけあつて、あいつの清元はいつ聴いても面白いな。

雜琴 去年のお月見にもあの人北洲を唄ひましたな。

勾當 さう、さう、あの時にも藝者太鼓の惣仕舞、賑かなことであつたな。おれが死んだら、あの眞似をするものは容易にあるまい。

雜琴 廓の遊びも段々さびしくなりませう。

清元 〽はや八朔の白無垢の、雪白妙に降りあがり。

(雜琴は下の方の木かげを見ておどろく。)

清元 〽なじみ重ねて、二度の月見に逢ひとて見とて、あはせ鏡の姿見に。

(雜琴は勾當の手をひきて上の方へ逃げようとするところへ、下の方より禿まつ代走り出でて雜琴に縫る。雜琴は餘儀なく立ちどまりて顔を見あはせる。)

まつ代 もし、花魁。座敷ではみんなが待つてゐます。お二人ともに早うお歸りなさんせ。

雜琴 わたし達は晝から飲み過したので、こゝで少し風に吹かれてゐる所。おまへこそ早う座敷へ行つて、馬角さんの面白い清元を聴いたがよい。

まつ代 でも、わたしは……。

雜琴 云ふことを背かぬと抓りますぞ。(睨む眞似をする。まつ代泣く。)